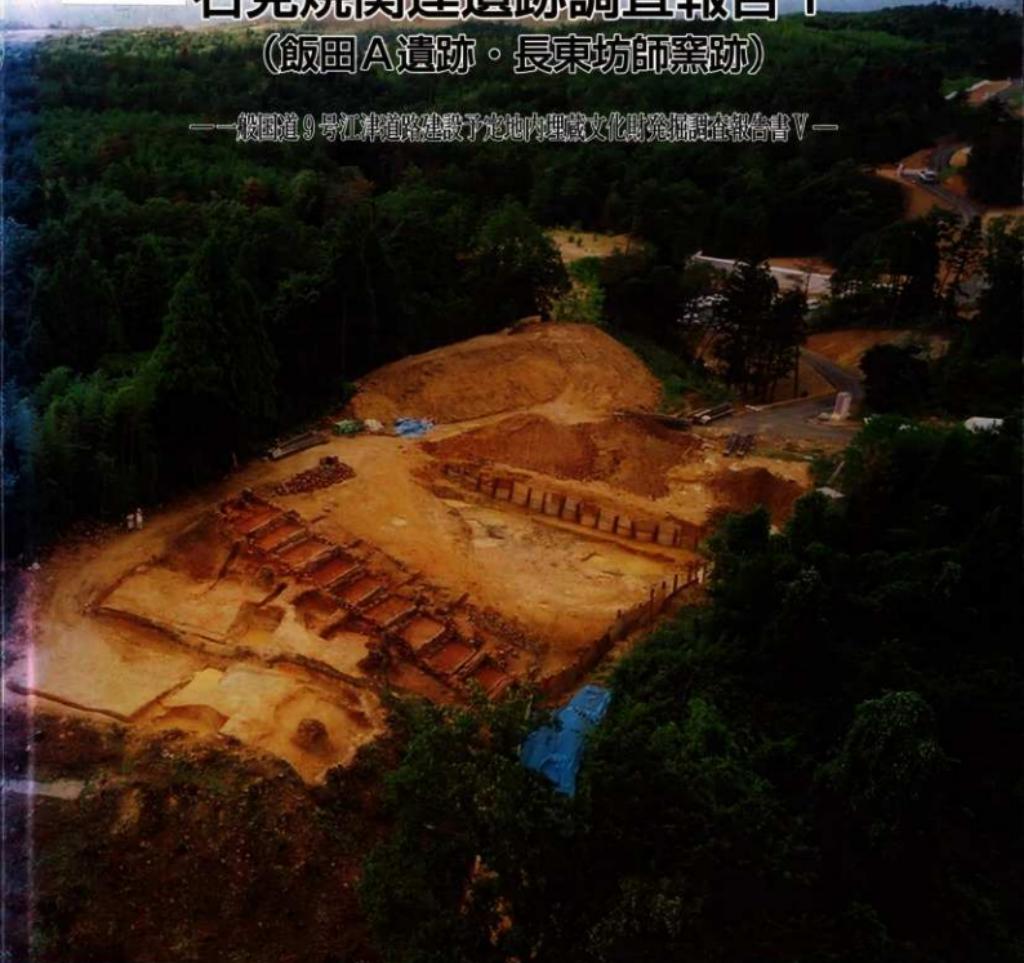


石見燒關連遺跡調查報告 1

(飯田A遺跡・長東坊師窯跡)

—一般国道9号江津道路建設予定地内地蔵文化財発掘調査報告書V—



2001年3月

島根県教育委員会
島根県浜田工事事務所

石見燒関連遺跡調査報告書 1 (飯田A遺跡・長東坊師窯跡)

—一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ—



2001年3月

国土交通省浜田工事事務所
島根県教育委員会

序

国土交通省浜田工事事務所においては、活力に満ちた石見地域を目指して、くらしの利便性、安全性、快適性の向上を図り、人や自然にやさしい環境形成にも配慮しつつ、道路整備を進めているところであります。

江津地区においても一般国道9号の交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し、地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして江津道路の事業を進めています。この道路は当面、山陰自動車道の機能を併せ持つ道路として活用を図ることとしており、国土の骨格を担う重要な道路でもあります。更に、過疎化が進み、若者の流出に悩むこの地域に活力を吹き込む道路でもあります。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも充分配慮しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

江津道路においても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同教育委員会や江津市教育委員会のご協力のもとに平成3年度から発掘調査を実施してきております。

本報告書は、平成9年度に実施した「飯田A遺跡」、平成10年度に実施した「長東坊師窯跡」の調査結果をまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術および教育のために広く利用されると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも充分留意しつつ進められることへのご理解をいただくことを期待するものであります。

最後に、今回の発掘調査および本書の編集にあたり、御指導御協力いただいた島根県教育委員会ならびに関係各位に対し心より謝意を表すものであります。

平成13年3月

国土交通省中国地方整備局浜田工事事務所

所長 藤井輝夫

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）の委託を受けて、平成4年度から一般国道9号江津道路建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施しております。このたび平成9・10年度に調査を実施した江津市二宮町、浜田市上府町に所在する飯田A遺跡、長東坊師窯跡の調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回調査した2遺跡は、石見地方の近世・近代史を考えるうえで、欠くことの出来ない石見焼に関する遺跡です。石見焼は近世後半に当地域で焼かれ始めた陶器で、近代以降は生産量も増加し、全国に販売されていたことが分かっています。

本書が地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり御協力を頂きました地元の皆様や国土交通省浜田工事事務所、江津市教育委員会、浜田市教育委員会、桜江町教育委員会、日原町教育委員会をはじめ、関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成13年3月

島根県教育委員会

教育長 山崎 悠雄

例 言

1. 本書は、建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成9・10年度に実施した一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査地は下記のとおりである。

飯田A遺跡	島根県江津市二宮町神主2053外
長東坊師窯跡	島根県浜田市上府町口262-9外
3. 調査組織は下記のとおりである。

調査主体	島根県教育委員会
平成9年度	飯田A遺跡
〔事務局〕	島根県教育庁文化財課 勝部 昭（課長）、島地徳郎（課長補佐） 埋蔵文化財調査センター 穴道正年（センター長）、古崎藏治（課長補佐） 瀧谷昌宏（企画調整係主事）
〔調査員〕	東森 晋（調査3係主事）、池田哲也（同教諭兼主事）、舟木聰（同臨時職員）、 中西一郎（桜江町総務課主幹）、中井将胤（日原町教育委員会主事）
〔調査協力〕	宮本徳昭（江津市教育委員会）、原 裕司（浜田市教育委員会）、柳原博英（同）
〔監修課員〕	上手文子、鹿森三鈴
- 平成10年度 長東坊師窯跡

〔事務局〕	島根県教育庁文化財課 勝部 昭（課長）、島地徳郎（課長補佐） 埋蔵文化財調査センター 穴道正年（センター長）、秋山 実（課長補佐）、 松本岩雄（課長補佐）、川崎 崇（企画調整係主事）
〔調査員〕	東森 晋（調査5係主事）、佐野木信義（同講師兼主事）、寺尾 令（同臨時職員）、 舟木 聰（同）、梅木茂雄（同）、岩田和郷（同）
〔調査協力〕	原 裕司（浜田市教育委員会）、柳原博英（同）
〔調査指導〕	鳴田春男（鳴田窯業所）
〔監修課員〕	上手文子、鹿森三鈴
- 平成12年度 報告書作成

〔事務局〕	埋蔵文化財調査センター 穴道正年（所長）、内田 融（総務課長）、 松本岩雄（調査課長）、今岡 宏（総務係長）、渡邊紀子（同主任主事）、 川崎 崇（同主事）
〔調査員〕	東森 晋（調査5係主事）、野津 清（同講師兼主事）、寺尾 令（同臨時職員）
〔調査協力〕	原 裕司（浜田市教育委員会）、柳原博英（同）、梅木茂雄（江津市教育委員会）
〔監修課員〕	三上恭子、神谷登喜美、柳原準子
4. 発掘作業（発掘作業員雇用等）については、建設省中国地方建設局、島根県教育委員会、(社)中国建設弘済会の3者協定に基づき、島根県教育委員会から(社)中国建設弘済会へ委託して実施した。
社団法人 中国建設弘済会島根支部
平成9年度 布村幹夫（現場事務所長）、小川剛史（技術員）、神山二美子（事務員）

平成10年度 布村幹夫（現場事務所長）、小川剛史（技術員）、大内悦子（事務員）

〔発掘作業員〕 飯田 正、石山広重、伊藤友太郎、入野時雄、岩本一男、上本忠行、
漆谷イッス、大崎勝人、大崎範久、大地本順子、人野初恵、大平正廣、
大屋徳仁、織田要子、上手峰子、佐々木久三子、山藤 晋、山藤 力、
椎木孝義、島田 豊、島津良三、竹内重治、竹内正忠、田中卓雄、徳田義一、
長瀬 清、永見義隆、中村忠男、中村政雄、野沢 敦、水室忠司、本田将司、
松原智史、松島真直、松木信孝、村上美佐子、森下好信、山下幸子、
山本新吾、横田 学、横田 泰、横田泰久、吉村武満

5. 現地調査、及び資料整理については、上記調査指導の先生方の他、以下の方々から有益な御助言をいただいた。記して感謝の意を表させていただく。（敬称略）

三沢治雄、若槻和郎（島根県立工業技術センター浜田工業技術指導所）

6. 本書で使用した図の内、第2図は大日本帝国陸地測量部発行のものを、第3図は国土地理院発行のものを、第4・23図は、建設省浜田工事事務所作成のものを、第5・24・25・27図は㈱アジア航測が作成したものをそれぞれ一部改変して使用している。また、第10頁・写真図版1・33・34・37の写真は㈱アジア航測が撮影し、72頁の写真は三沢治男氏に提供していただいた。

7. 本書に掲載した遺物の実測及び挿図の浄写は、主として以下の者が行った。

（実測）東森、池田、佐野木、寺尾、舟木、梅木、岩田、勝部悠美

（浄写）三上、神谷、柳原

8. 本書に掲載した遺物の写真撮影は、広江耕史（調査第6係長）の協力を得て野津が行った。

9. 本書の執筆は東森、野津、寺尾が行い、文責は目次に明示した。

10. 本書掲載の遺跡出土資料及び実測図、写真などの資料は島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打田町33）で保管している。

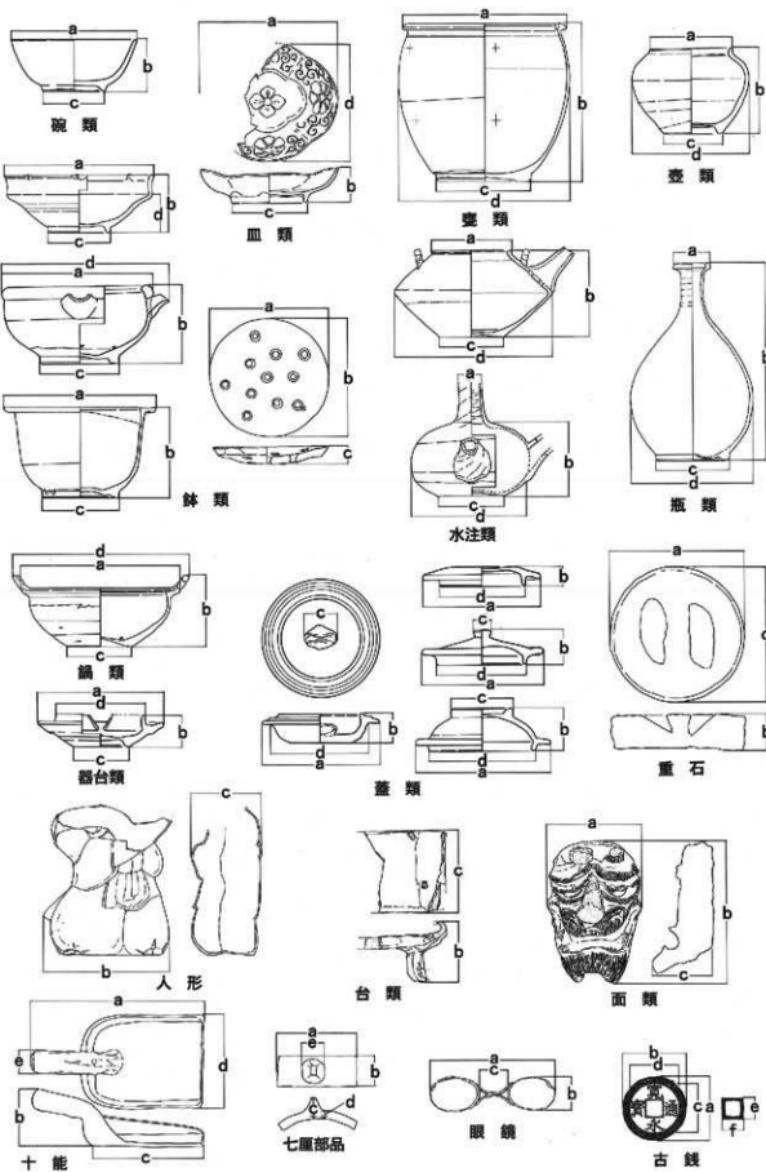
凡 例

1. 本書で使用した遺構・遺物の名称は、基本的に主要参考文献5及び8に従った。
2. 本文中の文献番号は、主要参考文献の番号と一致する。
3. 挿図で使用した方位は、測量法による第III座標系の軸方位を示し、レベル高は海拔高を示す。
4. 遺物実測図は、土器類は1/4、古鏡は1/1、その他の金属器は1/2の縮尺で掲載した。
5. 遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗りにし、金属器は断面に斜線を入れ、それ以外は白抜きにした。
6. 本文中、挿図中、写真図版中の遺物番号は一致する。
7. 観察表中の寸法計測部は、凡例図1・2による。

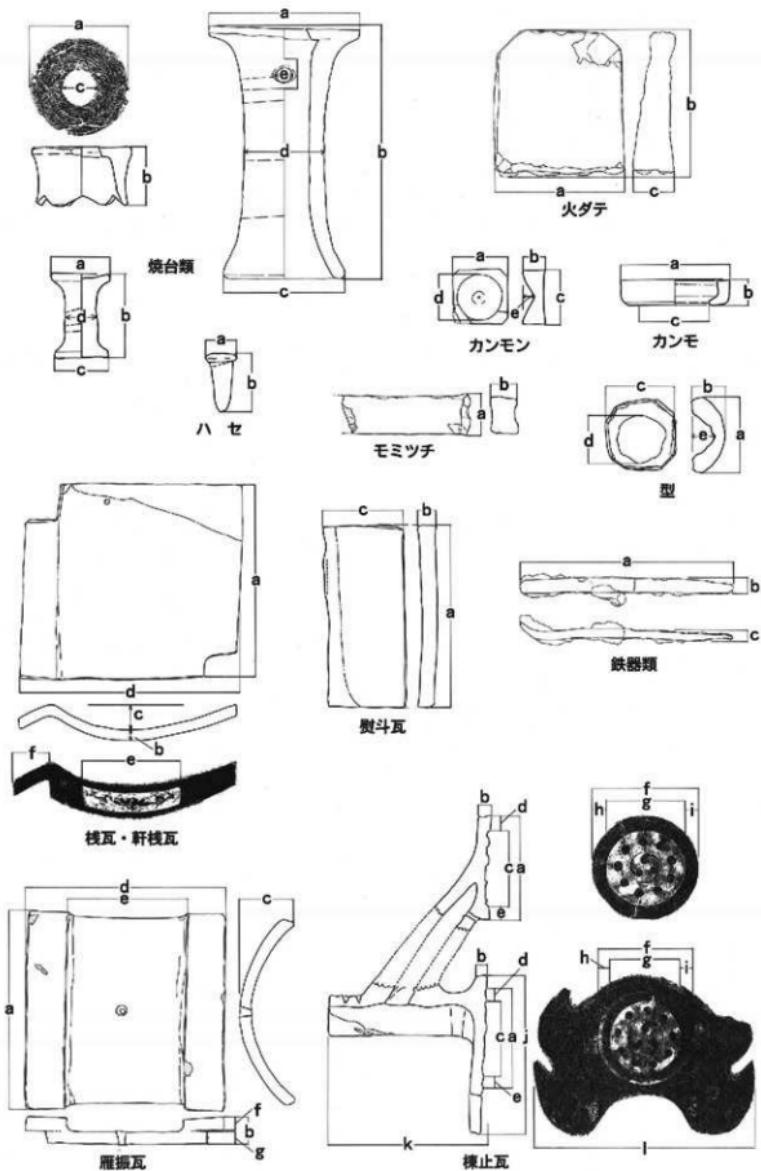
主要参考文献

- 1) 黒田貴保 1993 「石見地方における近世の窯業生産」『八雲立つ風土記の丘NO122・123』
島根県立八雲立つ風土記の丘
- 2) 柿木村教育委員会 1982 『唐人焼窯跡発掘調査概報』
- 3) 加藤唐九郎 1972 『原色陶器大事典』淡光社
- 4) 川本町教育委員会 1987 『谷戸経塚・木谷石塔発掘調査報告書』
- 5) 江津市教育委員会 1991 『田室窯跡発掘調査報告書』
- 6) 江津市教育委員会 1992 『平成3年度埋蔵文化財調査報告書』
- 7) 江津市文化財研究会 1986 『石見瀬 第十・十一号 江津市の窯と窯跡』
- 8) 江津市文化財研究会 1988 『石見瀬 第十三号 石見焼（丸物と瓦）』
- 9) 島根県教育委員会 1980 『右見國府跡推定地 調査報告Ⅲ』
- 10) 島根県教育委員会 1989 『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』
- 11) 島根県教育委員会 1992 『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 12) 島根県教育委員会 1992 『島根県遺跡地図Ⅱ（右見編）』
- 13) 島根県教育委員会 1997 「大田屋窯跡」『埋蔵文化財調査センター年報V 平成8年度』
- 14) 島根県教育委員会 2000 『神主城跡・室崎商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・横路古墓』
- 15) 新宿区四谷三丁目遺跡調査団 1991 『四谷三丁目遺跡』
- 16) 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査団 1997 『千駄ヶ谷五丁目遺跡 遺物編』
- 17) 浜田市 1973 『浜田市誌 下巻』
- 18) 原 裕司 1993 『生湯窯跡』『八雲立つ風土記の丘NO122・123』
島根県立八雲立つ風土記の丘
- 19) 東森 普 1999 「石見焼窯跡の発掘調査」
『平成11年度 島根県埋蔵文化財調査センター講演会資料』
- 20) 平田正典 1979 『石見粗陶器史考』石見地方史研究会
- 21) 広瀬町教育委員会 1988 『一飯梨川中小河川改修事業に伴う一富田川河床遺跡発掘調査概報』
- 22) 益田市教育委員会 1996 『益田拠点工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 23) 松田忠幸 1997.4.23~9.3 「角の浦今昔－江津の歴史と文化－」9~25 山陰中央新報
- 24) 三沢治雄 1998 「動木窯の物語を探る」史跡探訪会
- 25) 宮本徳昭 1993 『江津市の石見焼』『八雲立つ風土記の丘NO122・123』
島根県立八雲立つ風土記の丘
- 26) 山本 清 1995 『日本歴史地名体系33 島根県の地名』平凡社

凡例図 1



凡例図 2



本文目次

第1章 調査に至る経緯	（寺尾）	1	第3節 小結	34
第2章 遺跡の位置と歴史的環境		3	第4章 長東坊師窯跡	（東森・野津） 35
第1節 遺跡の位置と歴史的環境	（東森）	3	第1節 調査前の状況と調査の経過	35
第2節 石見焼の概略	（寺尾）	5	第2節 調査の結果	37
第3章 飯田A遺跡	（東森・野津）	9	第3節 小結	69
第1節 調査前の状況と調査の経過		9	第5章 まとめ	（東森） 71
第2節 調査の結果		12		

表目次

第1表 江津道路建設予定地内発掘遺跡一覧	2	第12表 長東坊師窯跡 登り窯各部計測表	38
第2表 周辺の窯業関連遺跡	8	第13表 長東坊師窯跡 建物計測表	47
第3表 飯田A遺跡 建物1計測表	12	第14表 長東坊師窯跡 土坑1～4計測表	47
第4表 飯田A遺跡 作業場1出土遺物観察表	13	第15表 長東坊師窯跡 建物出土遺物観察表	51
第5表 飯田A遺跡 出土古銭観察表	13	第16表 長東坊師窯跡 出土古銭観察表	51
第6表 飯田A遺跡 建物2計測表	21	第17表 長東坊師窯跡 上坑5～10計測表	53
第7表 飯田A遺跡 土坑計測表	21	第18表 長東坊師窯跡 山土陶器観察表①	67
第8表 飯田A遺跡 建物2・3出土遺物観察表	26	第19表 長東坊師窯跡 出土陶器観察表②	68
第9表 飯田A遺跡 出土陶器観察表	30	第20表 長東坊師窯跡 出土瓦観察表	68
第10表 飯田A遺跡 出土瓦観察表	31	第21表 長東坊師窯跡 出土窯道具観察表	68
第11表 飯田A遺跡 出土窯道具・その他の遺物観察表	33	第22表 長東坊師窯跡 出土窯道具・その他の遺物観察表	69

挿図目次

第1図 飯田A遺跡・長東坊師窯跡の位置	4	第10図 飯田A遺跡 作業場1土層断面、土坑3・4・5	18
第2図 飯田A遺跡・長東坊師窯跡周辺の窯業関連遺跡①	6	第11図 飯田A遺跡 出土遺物①	19
第3図 飯田A遺跡・長東坊師窯跡周辺の窯業関連遺跡②	7	第12図 飯田A遺跡 出土遺物②	20
第4図 飯田A遺跡 調査区配置図	10	第13図 飯田A遺跡 物原土層断面	22
第5図 飯田A遺跡 遺構配置図	11	第14図 飯田A遺跡 建物2、3出土状況	23
第6図 飯田A遺跡 登り窯周辺遺構	14	第15図 飯田A遺跡 建物3、土坑6	24
第7図 飯田A遺跡 土坑1・2、登り窯	15	第16図 飯田A遺跡 出土遺物③	25
第8図 飯田A遺跡 作業場1平面	16	第17図 飯田A遺跡 出土遺物④	27
第9図 飯田A遺跡 作業場1断面	17	第18図 飯田A遺跡 山土遺物⑤	28
		第19図 飯田A遺跡 出土遺物⑥	29

第20図	飯田A遺跡 出土遺物⑦	31
第21図	飯田A遺跡 出土遺物⑧	32
第22図	飯田A遺跡 出土遺物⑨	33
第23図	長東坊師窯跡 調査区配置図	36
第24図	長東坊師窯跡 造構配置図	38
第25図	長東坊師窯跡 登り窯増築後平面	39~40
第26図	長東坊師窯跡 登り窯増築後側面・綴断 土層・煙突部	41~42
第27図	長東坊師窯跡 登り窯増築後立面	43
第28図	長東坊師窯跡 登り窯増築後横断土層	44
第29図	長東坊師窯跡 登り窯増築前・盛土内瓦 積み	46
第30図	長東坊師窯跡 建物・土坑2・3	48
第31図	長東坊師窯跡 建物断面・建物模式図	49
第32図	長東坊師窯跡 出土遺物①	50
第33図	長東坊師窯跡 出土遺物②	51
第34図	長東坊師窯跡 窯跡南側平坦地上横断面	52
第35図	長東坊師窯跡 出土遺物③	55
第36図	長東坊師窯跡 出土遺物④	56
第37図	長東坊師窯跡 出土遺物⑤	57
第38図	長東坊師窯跡 出土遺物⑥	58
第39図	長東坊師窯跡 出土遺物⑦	59
第40図	長東坊師窯跡 出土遺物⑧	60
第41図	長東坊師窯跡 出土遺物⑨	61
第42図	長東坊師窯跡 出土遺物⑩	62
第43図	長東坊師窯跡 出土遺物⑪	63
第44図	長東坊師窯跡 出土遺物⑫	64
第45図	長東坊師窯跡 出土遺物⑬	65
第46図	長東坊師窯跡 出土遺物⑭	66
第47図	石見燒窯跡位置図	71
第48図	石見地方窯業遺跡生産品①	73~74
第49図	石見地方窯業遺跡生産品②	75~76
第50図	石見地方窯業遺跡生産品③	77~78
第51図	江津道路建設予定地内遺跡出土陶器片口	81
第52図	江津道路建設予定地内遺跡出土陶器標鉢	82

写真図版目次

写真図版1

- 上：飯田A遺跡 遠景（東から）
下：飯田A遺跡 遠景（西から）

写真図版2

- 上：飯田A遺跡 調査区遠景（北西から）
下：飯田A遺跡 登り窯調査前（東から）

写真図版3

- 上：飯田A遺跡 登り窯（東から）
下：飯田A遺跡 土坑1（西から）

写真図版4

- 上：飯田A遺跡 登り窯調査風景（東から）
下：飯田A遺跡 登り窯断面（東から）

写真図版5

- 上：飯田A遺跡 上坑1断面（東から）
下：飯田A遺跡 土坑1完掘後（西から）

写真図版6

- 上：飯田A遺跡 作業場5土留め（南西から）
下：飯田A遺跡 作業場3土留め（西から）

写真図版7

- 上：飯田A遺跡 石組み（南東から）
下：飯田A遺跡 土坑2（南西から）

写真図版8

上：飯田A遺跡 作業場1（南西から）

下：飯田A遺跡 作業場1造成土断面（西から）

写真図版9

- 上：飯田A遺跡 作業場1調査風景（北から）
下：飯田A遺跡 作業場1完掘後（北から）

写真図版10

- 上：飯田A遺跡 作業場1（北東から）
下：飯田A遺跡 眼鏡18出土状況（南東から）

写真図版11

- 上：飯田A遺跡 上坑3（南東から）
下：飯田A遺跡 土坑4・5（東から）

写真図版12

- 上：飯田A遺跡 作業場1カマド（南から）
下：飯田A遺跡 作業場1瓦積み（南東から）

写真図版13

- 上：飯田A遺跡 物原調査前（東から）
下：飯田A遺跡 物原調査風景（東から）

写真図版14

- 上：飯田A遺跡 物原A-A'ライン断面（東から）
下：飯田A遺跡 物原B-B'ライン断面

（北西から）

写真図版15

- 上：飯田A遺跡 物原A-A'ライン断面
(北西から)
下：飯田A遺跡 斧25・26出土状況(北西から)
- 写真図版16
上：飯田A遺跡 物原東側断面(西から)
下：飯田A遺跡 物原B-B'ライン不良製品堆積
状況(北から)

写真図版17

- 上：飯田A遺跡 作業場2調査風景(東から)
下：飯田A遺跡 建物2(東から)

写真図版18

- 上：飯田A遺跡 建物3(東から)
下：飯田A遺跡 物原出土品

写真図版19 飯田A遺跡 作業場1出土遺物

写真図版20 飯田A遺跡 作業場1出土遺物

写真図版21 飯田A遺跡 作業場1出土遺物

写真図版22 飯田A遺跡 作業場1出土遺物

写真図版23 飯田A遺跡 出土陶器

写真図版24 飯田A遺跡 出土陶器

写真図版25 飯田A遺跡 出土陶器

写真図版26 飯田A遺跡 出土陶器

写真図版27 飯田A遺跡 出土陶器

写真図版28 飯田A遺跡 出土陶器

写真図版29 飯田A遺跡 出土陶器

写真図版30 飯田A遺跡 出土瓦・窯道具

写真図版31 飯田A遺跡 出土窯道具

写真図版32 飯田A遺跡 出土陶器・磁器

写真図版33

- 上：長東坊師窯跡 調査前遠景(南東から)
下：長東坊師窯跡 調査後遠景(南東から)

写真図版34 長東坊師窯跡 調査後全景(北から)

写真図版35

- 上：長東坊師窯跡 登り窯北側検出時(北東から)
下：長東坊師窯跡 登り窯断面(北東から)

写真図版36 長東坊師窯跡 登り窯調査風景
(北東から)

写真図版37

- 上：長東坊師窯跡 登り窯(東から)
下：長東坊師窯跡 9番火格子(東から)

写真図版38

- 上：長東坊師窯跡 煙突部(東から)
下：長東坊師窯跡 ふかせ・付欄坊(北から)

写真図版39

- 上：長東坊師窯跡 7番北側検出時(北から)

下：長東坊師窯跡 7・8番床面検出時(北から)

写真図版40

- 上：長東坊師窯跡 7・8・9番断面(北から)
下：長東坊師窯跡 9番焚腔断面(北から)

写真図版41

- 上：長東坊師窯跡 登り窯A-A'ライン横断面
(北東から)
下：長東坊師窯跡 登り窯B-B'ライン横断面
(北東から)

写真図版42

- 上：長東坊師窯跡 登り窯盛土部分(北西から)
下：長東坊師窯跡 登り窯盛土部分断面及び瓦積み
検出状況(北東から)

写真図版43

- 上：長東坊師窯跡 登り窯北側瓦積み(北東から)
下：長東坊師窯跡 登り窯西側瓦積み(西から)

写真図版44

- 上：長東坊師窯跡 登り窯西側瓦積み拡大(西から)
下：長東坊師窯跡 登り窯西側瓦積み及び増築以前
の窯(南から)

写真図版45

- 上：長東坊師窯跡 建物調査前(北から)
下：長東坊師窯跡 建物(北から)

写真図版46

- 上：長東坊師窯跡 土坑1(北から)
下：長東坊師窯跡 十坑2(東から)

写真図版47

- 上：長東坊師窯跡 土坑3(南から)
下：長東坊師窯跡 土坑4(北東から)

写真図版48

- 上：長東坊師窯跡 土坑6(東から)
下：長東坊師窯跡 土坑6調査風景(南東から)

写真図版49 長東坊師窯跡 建物出土陶器

写真図版50 長東坊師窯跡 建物出土陶器

写真図版51 長東坊師窯跡 建物出土古銭・出土陶器

写真図版52 長東坊師窯跡 出土陶器

写真図版53 長東坊師窯跡 出土陶器

写真図版54 長東坊師窯跡 出土陶器

写真図版55 長東坊師窯跡 出土陶器

写真図版56 長東坊師窯跡 出土陶器

写真図版57 長東坊師窯跡 出土陶器・瓦・金属器・
窯道具

写真図版58 長東坊師窯跡 出土窯道具・磁器

第1章 調査に至る経緯

一般国道9号江津道路は、建設省（現国土交通省）により、4車線の自動車専用道路として建設が計画された。起点は江津市渡津町、終点は浜田市浜田自動車道浜田インターチェンジである。この計画は国道9号線の交通渋滞の緩和と、石見地域の高速交通網の整備を目的としている。

江津道路建設の計画を受け、島根県教育委員会文化課（以下文化課という）は、平成元年に江津市嘉久志町から敬川町までの分布調査を行い13か所の遺跡の存在を確認した。

平成3年1月に4者協議（建設省浜田工事事務所、県土木部、文化課、江津市教育委員会）を行ない、発掘調査について具体的な検討がなされた。その結果、平成3年度には建設省の委託を受けた江津市教育委員会が発掘調査を行うこととなり、7月に江津市二宮町の半田浜西遺跡、翌平成4年1月には同都野津町のカワラケ免遺跡、鹿伏山遺跡のトレンチ調査が行われた。これらの遺跡の調査の後、3者協議（建設省、江津市教育委員会、文化課）を行い、平成4年度から文化課が本調査に入ることになった。

平成4年度は鹿伏山遺跡、半田浜西遺跡、平成5年度は江津市嘉久志町の久本奥窯跡、同二宮町の二宮C遺跡、同敬川町の古八幡付近遺跡、カワラケ免遺跡、平成6年度は江津市嘉久志町の嘉久志遺跡、同二宮町の飯田C遺跡、古八幡付近遺跡1～5区の発掘調査を行った。一年おいて平成8年度は江津市二宮町の恵良遺跡、同波子町の大田屋窯跡、平成9年度は江津市二宮町の神主城跡、飯田A遺跡、古八幡付近遺跡6・7区、同敬川町の横路古墓、平成10年度は、江津市敬川町室崎商店裏遺跡、古八幡付近遺跡8・9区、浜田市上府町の長東坊窯跡、平成11年度は江津市波子町の堂々炭窯跡、浜田市上府町の上条遺跡、上条古墳、上府八反原窯跡、平成12年度は立女遺跡の発掘調査を行った。

なお、平成9年9月に予定ルートの変更に伴う遺跡の分布調査の依頼を受け、12月から3月にかけて再度の分布調査を実施し、新たに8か所で遺跡の存在を確認した。このうち2か所については、平成10年度に再度検討した結果、本発掘調査を行う遺跡から除外している。

第1表 江津道路建設予定地内発掘遺跡一覧

(平成13年3月現在)

遺跡名	発掘年度	主な内容	備考
半田浜西遺跡	平成4年度	弥生～中世 集落跡 掘建柱建物2、溝10、土坑1、石積み	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ
鹿伏山遺跡	平成4年度	土坑1、繩文土器片	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ
二宮C遺跡	平成5年度	弥生時代後期 集落跡 古墳時代中期 集落跡、竪穴住居 中世 掘建柱建物2	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ
久本奥窓跡	平成5年度	7世紀後半～8世紀後半 地下式登窓1 掘建柱建物1	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ
古八幡付近遺跡	平成5年度 平成6年度 平成8年度 平成9年度 平成10年度	縄文～近世 集落跡 弥生中期 環濠集落跡 竪穴住居4、掘建柱建物46、溝15、土坑10 古墳2(横穴式石室)	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査 報告書Ⅱ・Ⅲ
嘉久志遺跡	平成6年度	時期不明 級塚 土坑1	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ
飯田C遺跡	平成6年度	散布地 弥生土器片、須恵器片、土師器片	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ
恵良遺跡	平成8年度	古代末～中世 集落跡 掘建柱建物6、溝6	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ
大田屋窓跡	平成8年度	石見焼生産遺跡(明治時代中心) 連房式登窓1	平成8年度 埋蔵文化財調査センター一年報
神主城跡	平成8年度 平成9年度	中世 山城跡 郭、腰郭、土壘、堀切、土壙墓18、窓1、溝1	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ
飯田A遺跡	平成9年度	石見焼生産遺跡 窓跡1、作業場跡3	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ
横路古墓	平成9年度	古墳後期 集落跡 近世 焼窓跡 掘建柱建物5、土壙墓5	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ
室崎商店裏遺跡	平成10年度	古墳 横穴式石室	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ
長東坊師窓跡	平成10年度	石見焼生産遺跡 連房式登窓1、建物跡1、土坑9	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ
堂々遺跡	平成11年度		工事予定地内で遺構・遺物は検出されず。
堂々炭窓跡	平成11年度	近世後半～末期 炭窓跡(半地下式構造)	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ
堂々古墳	平成11年度		工事予定地内で遺構・遺物は検出されず。
上条遺跡	平成11年度	柱穴群、古道 白磁IV類碗	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ
水戸(三戸)神社跡 (上条古墳)	平成11年度	古道(土堤) 時期不明の段状遺構、加工段	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ
上府八反原窓跡 (佐々木窓跡)	平成11年度	石見焼生産遺跡 連房式登窓1、道	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ
立女遺跡	平成11年度	土坑1、pits群	一般国道9号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ
先打井畑遺跡Ⅰ区			
先打井畑遺跡Ⅱ区			
先打井畑遺跡Ⅲ区			
大尾谷遺跡			

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の位置と歴史的環境

島根県中部に位置する江津市は、中心を中国地方最大の河川である江の川が流れ、北の日本海へ注いでいる。飯田A遺跡の所在する江津市二宮町は、北部が日本海に面し、江津市西部の三日月形の沖積平野の中心にある。南部は標高約150～200mの山塊が広がっている。

石見地方（島根県西部）の中央部に位置する浜田市は、古代に石見国府が置かれ、近世には浜田藩が中国地方の押さえとされるなど、古くから石見の中心として栄えた地である。長東坊師窯跡の所在する浜田市上府町荒相は浜田市東部の久代川流域に位置している。「東坊師」は東傍示の転化したもので、伊丹郷の東境界を示すものとの考えもある（文献9）。

江津・浜田両市は良質の陶土に恵まれ、近代以降盛んに右見焼の製造が行われた。以下、遺跡周辺で確認された主要な遺跡を紹介したい。

縄文時代

縄文時代の遺跡は人平山遺跡群や鹿伏山遺跡、古八幡付近遺跡、上条遺跡など数ヶ所が知られている。大平山遺跡群では中期から晩期の土器が出土しており、特に縄文中期の地域的な土器型式として「波子式」が設定されている。

弥生時代

弥生時代は縄文時代に比べると資料が増加する。代表的な集落遺跡としては、古八幡付近遺跡、伊丹神社脇遺跡が挙げられる。これらの遺跡では弥生時代全般の遺物が出土しており、古八幡付近遺跡では中期の居住域や環壕等が確認された。また、伊丹神社脇遺跡と同じ下府川流域では、上流の谷間に位置する上条遺跡で扁平紐式銅鐸2個体が出土している。

古墳時代

古墳時代の集落は、二宮C遺跡、横路古墓など江津市内で僅かに知られる程度である。しかし、半田浜西遺跡、古八幡付近遺跡、伊丹神社脇遺跡では、土器溜まりや包含層から遺物がまとまって出土しているので、調査区周辺に集落の中心が存在したと思われる。古墳は確実に前期・中期と思われるものは確認されていない。江津市の高野山古墳群、古八幡付近古墳群、浜田市の片山古墳など横穴式石室を主体部とする後期古墳がほとんどである。また、古墳時代後期になると江津市西部では窯業生産が行われ、久本奥窯跡が発掘調査されている。

古代

律令時代になると下府川流域には石見国府が置かれ、地方主要道である山陰道が設定された。現在石見国府の所在は確定されていないが、下府廃寺や石見国分寺・同國分尼寺が所在するなど地域の中心として栄えた様子が窺える。資料数も他の時代に比べて多く、下府の横路遺跡、江津市西部の半田浜西遺跡、古八幡付近遺跡では多数の遺構・遺物を検出している。特に、これらの遺跡からは、奈良三彩、統一新羅上器、越州窯青磁、綠釉陶器などの遺物が出土している点が重要である。窯業生産も引き続き行われ、久本奥窯跡、奈古田窯跡で須恵器が、石見国分寺瓦窯跡では瓦が生産されている。また、久木奥窯跡では、下府廃寺と同文の軒丸瓦や砥尾が出土しており関係が注目さ

れる。このほか都野津町の清水遺跡では、火葬骨を納めた平安時代の須恵器壺が出土している。

中世

下府川流域では、古代からの国府は新たに「府中」として発展し、南北朝期まで栄えたと考えられている。代表的な遺跡として、集落遺跡で古市遺跡、横路遺跡が、城跡で猿山城跡、八反原城跡が挙げられる。また、伊賀山安国寺、伝御神本（益田）氏三代の墓、白口人明神、上府八幡宮も所在する。江津市西部は国人領主である都野氏が支配し、戦国末期に江川西岸の郷田に拠点を移すまで、二宮町に拠点が置かれていたとされる。代表的な集落遺跡として二宮C遺跡、古八幡付近遺跡が挙げられ、城跡としては都野氏の神主城跡のほか、福屋氏の拠点である本明城跡が挙げられる。

近世・近代

近世になるとこの地域は浜田藩領となる。浜田は中国地方の押さえとして幕府に重視され、水陸交通の要衝として栄えた。近世後半頃になると、都野津層に含まれる豊富で良質な粘土を主原料に瓦・陶器等の石見焼の生産が活発になり、現在に至るまでこの地域の主要産業の一つとなっている。石見焼の窯は山の斜面を利用した連房式登り窯で、膨大な数の窯が操業していたと考えられるが、実体は完全に把握されていない。江津市西部ではこれまでに田室窯跡、三浦窯跡、飯田A遺跡、大田屋窯跡が、浜田市東部では長東坊師窯跡、上府八反原窯跡（調査時は佐々木窯跡）、生湯窯跡が発掘調査されている。



第1図 飯田A遺跡・長東坊師窯跡の位置

第2節 石見焼の概略

石見焼については、石見一円の窯で焼かれたものすべてを含めるか、あるいは、地域を限定するか、また、瓦を含めるか等いろいろな見方があり、確かな答えは見当たらない。おそらく自然発生的に生じたものであり、正しくは石見で生産される焼き物、すなわち、石見の焼物といったところであろう。本報告書では、石見地方で生産される瓦及び後述する「丸物」とそれに準ずる技法で作られた焼き物を石見焼の対象とした。

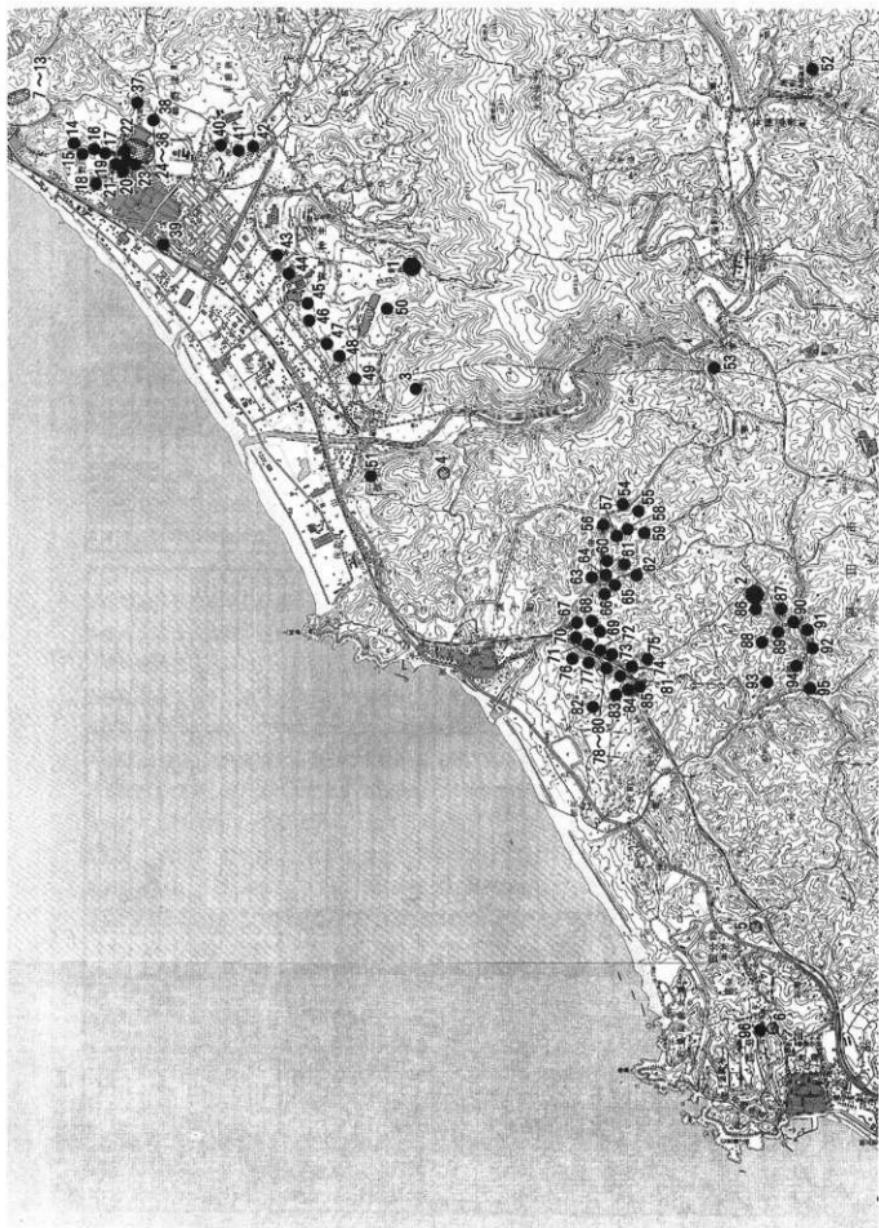
島根の西半分をしめる石見には海岸線に沿って都野津累層と呼ばれる堆積層が不連続に分布する。このなかには陶土として利用できる良質の粘土が多量に含まれ、古くから焼き物の原料とされてきた。また、かっては燃料用材としての豊富な森林資源もあり窯業地としての自然の条件は備わっていた。こうした風土を背景にいつごろ陶器の生産が始まったか、また、何をもって石見焼の始まりとするかいろいろと意見の分かれることもあるが、その石見焼と呼ぶ名称はともかく、江戸のいすれのころからか徐々に窯業地としての形態を整え、江戸の末期になるとかなりの窯を数えるに至った。こうして、順調な経過をたどってきた石見焼も、明治以降に進出してきた小型の磁器製品に遅れをとり、食器類の生産からの撤退を余儀なくされながらも無尽蔵に近いとさえいわれた多量の陶土を背景に磁器と競合しないより大型の容器、すなわち「荒物」と呼ばれる甕や壺、その他擂鉢、程鉢、片口等の炊事用の粗陶器に活路を見出した。その結果、おりから需要増しもあって大正をはさむ明治から昭和にかけてはかつてない程の活況を呈し、その販路は近隣はもとより、東は北陸から北海道、西は瀬戸内から四国、九州さらには海をこえて大陸にまで及んだ。しかし、生活様式の変化に加えて戦後になって新たに参入してきた合成樹脂を原料とする生活用品と正面からの競合となりその利便性、価格等において遅れをとり、需要に陰りが見え始め撤退があいつぎ、生産量が激減し今日に至っている。

石見焼が今口まで一貫して造り続けてきたのは「丸物」と総称する陶製の生活用品とそれに遅れて始まる瓦である。「丸物」の器種構成は単純で多少の例外を承知で要約すれば、赤色の陶土でつくる甕と擂鉢、白色の陶土を利用する壺、捏鉢、それに片口に分けられる。これに利用する釉薬の種類もわずかで甕と擂鉢には初期のものには粘土層中に座する通称「カナハサリ」と称する鈎土を利用した鈎釉を、後に山雲の穴道産の来待釉と呼ばれる凝灰質砂岩を粉碎した「来待釉」をかけ赤茶色に発色させ、それ以外の物には石見の温泉津産の長石を主原料とする「並釉」と称する透明釉をかける。くわえて、甕には胴部に3か所、来待釉に並釉を加えた黒色の釉を流し懸け（「流し」と呼ばれる）、甕には呪須か酸化コバルトで蓋に簡単な模様を印す他、甕と同様な方法で胴部の流し懸けにより青色に発色させ石見焼を特色づける装飾とする。

このような単純な器種構成で石見の窯業地が過去において国内の有数の粗陶器の产地として隆盛を極めた背景には、豊富で良質な陶土や燃料材等の自然の条件に加えて、北前船の利用等日本海沿いの海路をはじめ幾多の海路による海上輸送が可能だったことがあげられる。また、生産の工程における大型の甕の成形に見られるような卓越した技術、「生掛け」に見られる生産にかかる費用を出来る限り低く抑える工夫等大きな要因として見逃すことはできない。今日、最新の技術の開発や導入により石見の赤瓦、すなわち「石州瓦」として全国的な名声を勝ち得た瓦、新しい時代への対応に遅れをとり昔日の面影もない「丸物」、明暗の両面を抱えているのが今日の石見焼である。



第2図 飯田A遺跡・長東坊跡周辺の商業開道跡①（明治34年陸地測量部発行の地図を一部改変 S = 1 / 40000）



第3図 飯田A遺跡・長東坊跡周辺の墓業関連遺跡②（平成2年国土地理院発行の地図を一部改変 S = 1 / 40000）

第2表 周辺の商業開拓遺跡

第3章 飯田A遺跡

第1節 調査前の状況と調査の経過

1. 調査前の状況

飯田A遺跡は、江津市二宮町の平野と山地との境目に位置している。遺跡周辺は良質な陶土が豊富に埋蔵され、遺跡の西方約400mに所在する室崎商店裏遺跡（文献14）でも石見焼の登り窯を確認している¹¹⁾。調査区は平成6年度のトレンチ調査の結果をもとに、標高82~88mの丘陵尾根上に設定した。調査前の遺跡は樹木が茂り、尾根上と北側斜面を中心に不良製品や築窯材が散乱していたが、登り窯の痕跡は全く確認できなかった。立木伐開後の尾根上は約20×10mの平坦地が東西に伸びていた。斜面は北側が急傾斜しているのに対し、南側は比較的傾斜が緩く、作業場1および作業場3~5の土留めを確認することが出来た。また、南斜面の調査区外にはさらに広い平坦地が続いているので、遺跡の本体は丘陵の南側に存在し、物原や作業場の一部が工事用地内にかかっていると判断した。

2. 調査の経過と概要

本調査は平成9年7月30日より開始している。調査は物原に任意の主軸を設定して掘り下げることから始めた。その結果、主軸断面で貼床や礎石、地山に据えられた甕を検出し、物原内に遺構が存在することを確認した。このため物原の掘り下げは精査・実測と平行して行う必要があり、掘削の中心を調査区東側に移すことにした。そして8月8日から昼休みに入り、調査は一旦休止した。

その後調査は8月18日に再開し、作業場1の掘削は8月20日から行った。作業場1は表土が20cm前後堆積しているのみで、礎石・カマド・土留め等の遺構は比較的スムーズに検出することが出来た。8月27日には登り窯の検出が予想された南斜面の掘削を開始した。南斜面では薄い焼土の堆積や土留めを施した作業場しか検出できなかったが、9月1日に調査区南端で登り窯の煙出しと思われる遺構を検出した。さらにそこから調査区外の南斜面を踏査してみると、登り窯跡と推測される階段状の地形が約9.3m統一しており、作業場の上留めらしきものも確認できた。階段状の地形は斜面裾近くで山道に切られ、そこから南に平坦地が続いていたが雑木が生い茂りそれ以上の踏査と測量調査はひとまず断念した。以上の状況から登り窯及び作業場等の窯場本体は、調査区南側とそこから西に下る谷にあると判断した（第4図参照）。

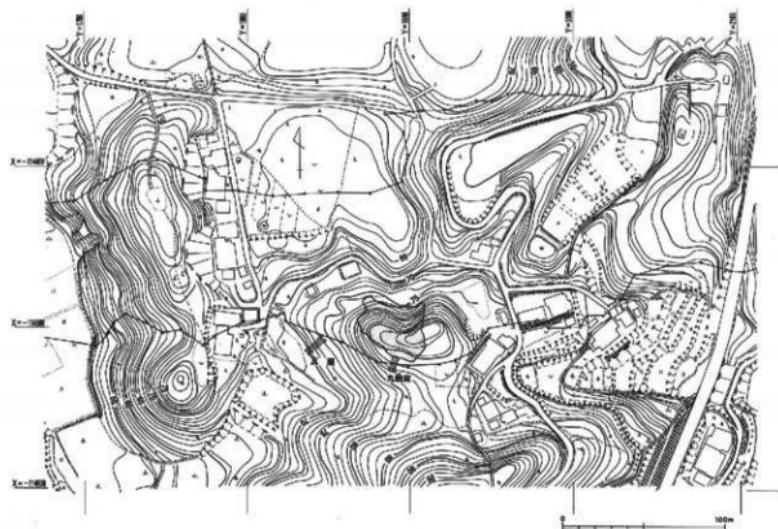
9月24日には物原内で建物2を検出した。さらに建物2の床面を掘り下げると、地山面でコの字状の溝と甕の底部を検出した。これらの遺構は10月3日に全ての写真撮影・実測を終え、物原の調査は終了した。10月6日からは登り窯周辺の遺構の実測と作業場1の盛上の掘削を行った。盛土内には不良製品や築窯材が多量に含まれており、古い登り窯が埋没している可能性も考えられた。しかし完掘後は不明瞭な土坑状の落ち込みを確認したのみで、別の登り窯は検出されなかった。

その後10月16日にラジコンヘリによる空撮を行い、10月21日に現地調査を完了した。

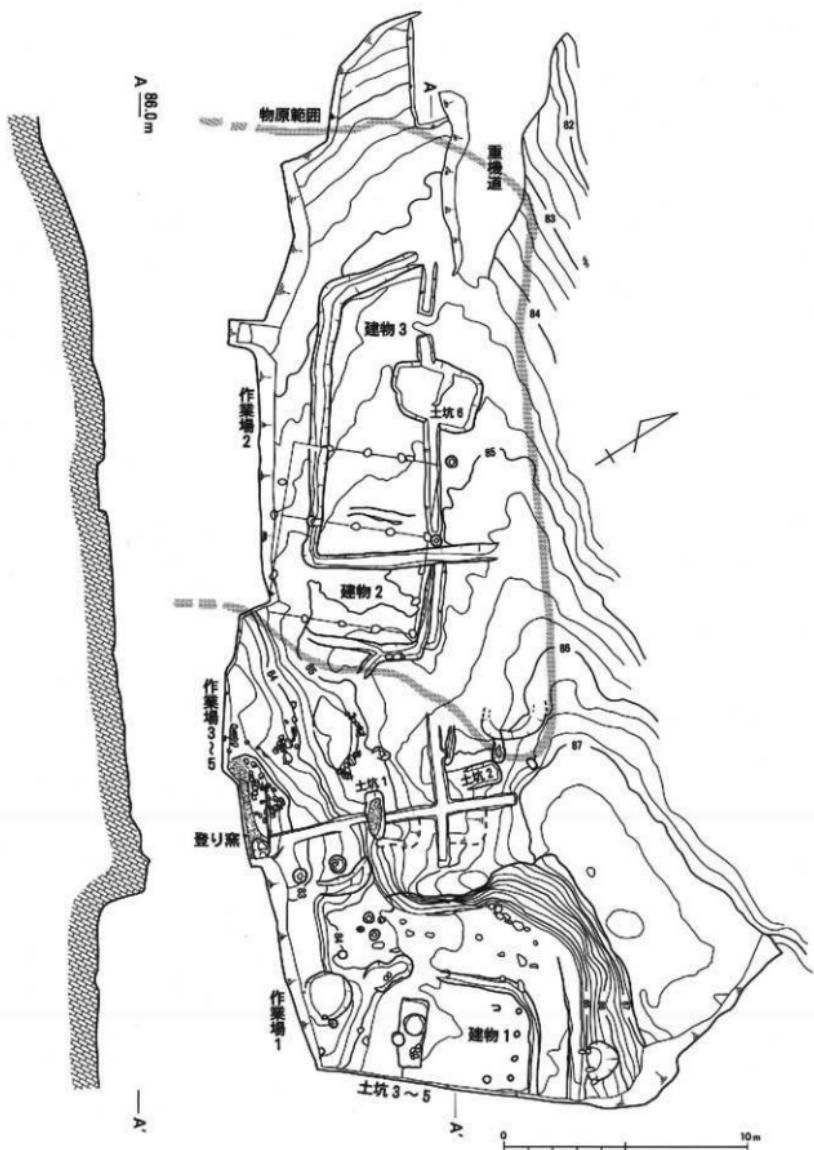
(1) 室崎商店裏遺跡は江津市二宮町・敬川町の室崎商店窯業部裏山に所在する。文献14で既に報告しているが、この時点では窯業遺跡と判断できなかった。その後現地で登り窯を確認し、トレンチ調査時に未焼成品や窯道具が出土していたことも確認した。このため今後は石見焼の窯業遺跡としての性格も加えるべきだと思われる。



飯田A遺跡（中央下より）と室崎商店裏遺跡（中央左より）の伐開部分



第4図 飯田A遺跡 調査区配置図 ($S = 1/3000$)



第5図 飯田A遺跡 遺構配置図 ($S = 1/200$)

第2節 調査の結果

1. 登り窯と周辺の遺構（第6図）

登り窯（第7図、写真図版3・4）

調査区の南端で最後尾のみ検出した。床に並べられていたアゼ⁽²⁾は、厚さ約6cmと薄く平たい。床面は調査区南壁に向かって赤く変色していたが、耐火砂は検出してない。アゼの並びの北側には、斜面を急角度に掘った床面幅約40cmの溝が設けられていた。溝の上層にはアゼ・瓦・窯道具が堆積し、瓦の内側には全面にススが付着していた。こうした状況から、溝の上層で検出したアゼや瓦は、これらを使用した煙出し⁽³⁾が登り窯廃棄後に崩れて溝の中に転落したものと考えられる。

土坑1（第7図、写真図版3・5）

登り窯の斜面上方、4m東で検出した。土坑内には炭と焼土が堆積し、アゼの破片を多数検出した。床面は高熱のために赤く焼けていた。詳しい性格は不明だが、登り窯に関係した遺構であろう。

土坑2（第7図・写真図版7）

土坑1の斜面上方で検出した。床面はほぼ平坦で、南側は流失していた。土坑内からはアゼや窯道具が出土したが、詳しい性格は不明である。

その他の遺構（第6図、写真図版6・7）

登り窯に隣接して作業場3～5を検出した。地山を削った平坦地に、窯道具・築材・不良製品を使用した土留めを施している。土留めの中には礎石と考えられる物も含まれる。石見焼の登り窯では右側に造られるのが一般的だが、ここでは左側に造られている。また、調査時に石組と判断した石の集まりは、扁平な形の石がほとんどで、不要になった礎石を集めて片づけた可能性もある。

2. 作業場1（第8～10図、写真図版8～10）

登り窯の東側に位置する。丘陵南斜面を最大で約2.8m削り、南側は最大で約1.2m盛土して平坦地を造っている。平坦地の規模は約15×20m以上で、東側は調査範囲に含んでいない。

建物1（第8図）

作業場1の床面では礎石と礎石を据えたと思われる窓みを17か所検出した。これらを利用した礎石建物が建てられていたと考えられるが、調査区の東側にも続く可能性が高く、全体の規模は不明である。建物の北側には排水用の溝が設けられていたが、礎石の下からもL字に曲がる溝を検出し

第3表 飯田A遺跡 建物1計測表

規 模 主 舗	東 行 き					西 行 き				
	5間 以 上					5間 以 上				
	N - 52° - W									
礎石・穴	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
標高(m) 上 地 面	84.31	84.31	7	7	7	7	7	84.20	7	?
標高(m) 底 面	84.17	84.19	84.18	84.20	84.16	84.13	84.59	84.08	84.12	84.15
標 高	11	12	13	14	15	16	17			
平野標高(cm)	30×22	34×22	31×20	28×19	28×19	52×25	40×27			
標高(m) 上 地 面	84.76	84.76	84.70	84.69	84.66	84.72	84.60			
標高(m) 底 面	84.68	84.60	84.56	7	84.56	84.50	84.46			
柱間距離(cm)	1-2	2-3	3-4	4-5	5-6	6-7	7-8	8-9	9-10	10-11
	100	100	100	100	80	-	100	120	300	-
	11-12	12-13	13-14	14-15	15-16	16-17				
	210	80	7	90	110	400				

(2) 築材量の煉瓦は生作りのときの寸法によって、大トンバリ（1尺2寸×1尺2寸×5寸）、小トンバリ（1尺2寸×8寸×5寸）、アゼ（9寸×6寸5分×4寸5分）と呼ばれ、施成後は1～2割収縮する。（文献8）

(3) アゼと瓦を使用した煙出しは、生糞遺跡の登り窯で調査されている。（文献11）

ており、1回以上の建て替えが行われたと推測される。建物の南側床面では焼土を検出している。

土坑3~5 (第10図、写真図版11)

作業場1の床面ほぼ中央で検出した。土坑3は東側に一段低くなっているが、土層を観察すると、この部分を埋めた後に西側に拡張したと判断される。また、拡張後の土坑床面には焦灰色の粘質土が堆積している。堆積土の様子から、水槽等に使用されたと推測される。土坑4は平面が円形で、床面では土坑の壁面に沿うようにカーブする幅3cm前後の溝を検出した。桶などを据えていたと考えられる。土坑5はこれらの土坑に比べ規模が小さく、性格は不明である。

カマド・瓦積み (第8図、写真図版12)

作業場の北側で基底部のみ検出した。壁面の一部を丸く削り、アゼを3列並べている。床面で焼土・炭を検出していないが、アゼ列の東側に立てられた石は赤黒く変色していた。また、作業場の壁面には、石見焼の瓦が貼り付けてられていた。不良製品を利用してたり、この窯で生産された瓦と思われる。

作業場1出土遺物 (第11~12図、写真図版19~22、32)

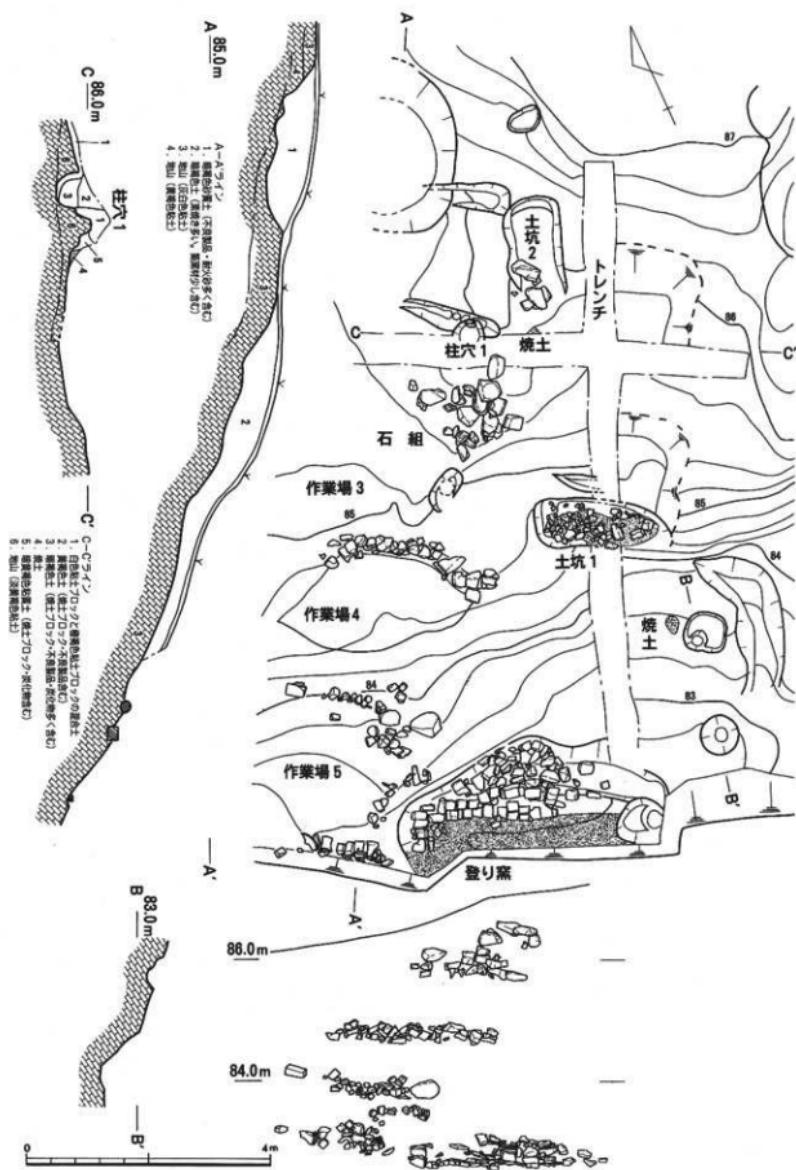
作業場1からは磁器及び陶器の製品が出土している。このうち確実に本遺跡の製品と思われる物は3・9~11・13~16である。13は同じタイプの蓋が4個体あるが、発色不良により来待釉と黒色の流しが全て違う色合いでいる(写真図版21)。15の灯明皿には使用した痕跡がある。人形(17)は、浜田市長浜町で生産されているものに似ているが、着色していない。眼鏡(18)は床面出土遺物で(写真図版10)、鼻宛が無く棒状の部品は角柱状の形をしている。21は地元で「はんど」と呼ばれる大甕である。藍染めなどに使用される埋設用のタイプで、遺跡内で出土した他の甕とは大きく異なる作りをしている。古銭は24が床面で出土し、23は調査区外の西斜面で表採した。

第4表 飯田A遺跡 作業場1出土遺物観察表

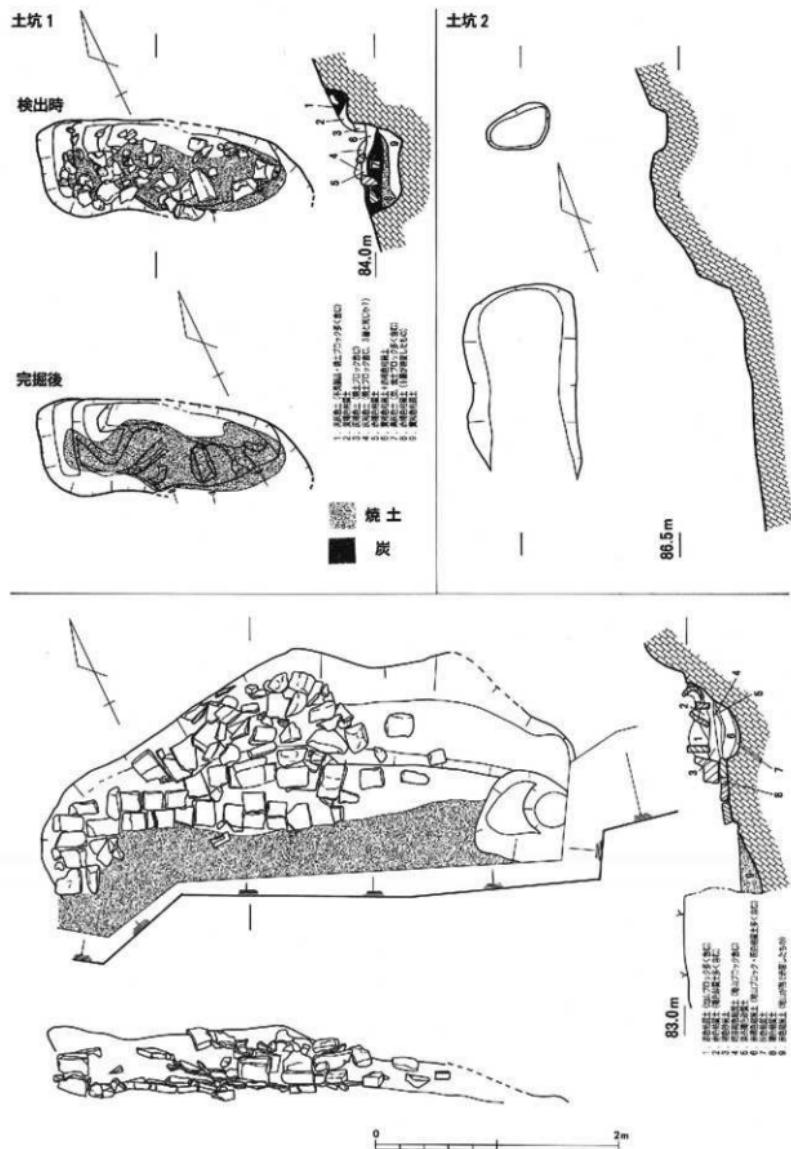
排図 番号	写真 図版 番号	遺物 種別	器種	寸法(cm)					胎土	釉薬	出土地点	備考		
				a	b	c	d	e						
11	19	1	磁器	小瓶	?	?	3.1	—	—	白色	透明釉	作業場1		
11	19	2	磁器	中瓶	11.2	4.8	5.5	—	—	灰色	透明釉	作業場1		
11	19	3	磁器	小瓶	8.7	4.9	2.9	—	—	灰色	並釉	作業場1	鉄絆	
11	19	4	磁器	壺口	(7.6)	?	?	—	—	茶褐色	灰・白釉	作業場1	肥前系 底部鉄絆の型抜き	
11	19	5	磁器	仏塔形	?	?	4.2	—	—	白色	透明釉	作業場1	輪削に赤色墨絆	
11	19	6	磁器	小皿	9.5	1.7	5.3	—	—	白色	透明釉	作業場1	網の奥須絆 計2点出土	
11	20	7	磁器	小皿	9.5	2.2	3.8	—	—	白色	透明釉	作業場1	網絆?の奥須絆 計4点出土	
11	21	8	磁器	小皿	10.1	2.9	4.2	—	—	白色	透明釉	作業場1	見込みに花・鳥の奥須絆	
11	19	9	陶器	小皿	9.7	3.4	4.8	—	—	明灰褐色	並釉	作業場1		
11	20	10	陶器	小皿	9.4	3.4	5.4	—	—	明灰褐色	並釉	作業場1	見込みに「よ」、底部に「忍」の文字	
11	20	11	陶器	小皿	6.3	1.2	4.0	—	—	淡黄色	並釉	作業場1	中心に徑6mmの穴	
11	19	12	陶器	中皿・長四弁舟	15.8	4.0	8.7	—	—	灰色	透明釉	作業場1	内面に草花の陰刻 型抜き	
11	21	13	陶器	蓋	—	3.4	4.7	11.4	—	—	灰白色	來待・並釉	作業場1	裏面の「造し」 計4点出土
11	19	14	陶器	蓋	9.4	2.8	1.9	7.0	—	淡黃褐色	青絆	作業場1		
11	19	15	陶器	灯明皿	10.5	2.9	4.7	—	—	淡黃褐色	並釉	作業場1	外縁にスズが付着	
11	19	16	陶器	灯明皿	9.1	2.8	4.7	7.0	—	灰色	並釉	作業場1	高台に施釉時の指跡	
11	22	17	陶器	人形	—	20.8	11.3	—	—	黃褐色	—	作業場1	素焼き	
11	20	18	硝子	眼鏡	10.2	2.9	2.5	—	—	—	—	作業場1		
11	21	19	硝子	釘	?	1.0	—	—	—	—	—	作業場1		
11	21	20	硝子	不明	?	1.9	—	—	—	—	—	作業場1		
12	22	21	陶器	大甕	(64.4)	?	(74.8)	—	—	赤茶色	絆	作業場1	埋設用	
12	22	22	硝子	瓶	2.3	5.7	5.6	6.0	—	—	—	作業場1		

第5表 飯田A遺跡 出土古銭観察表

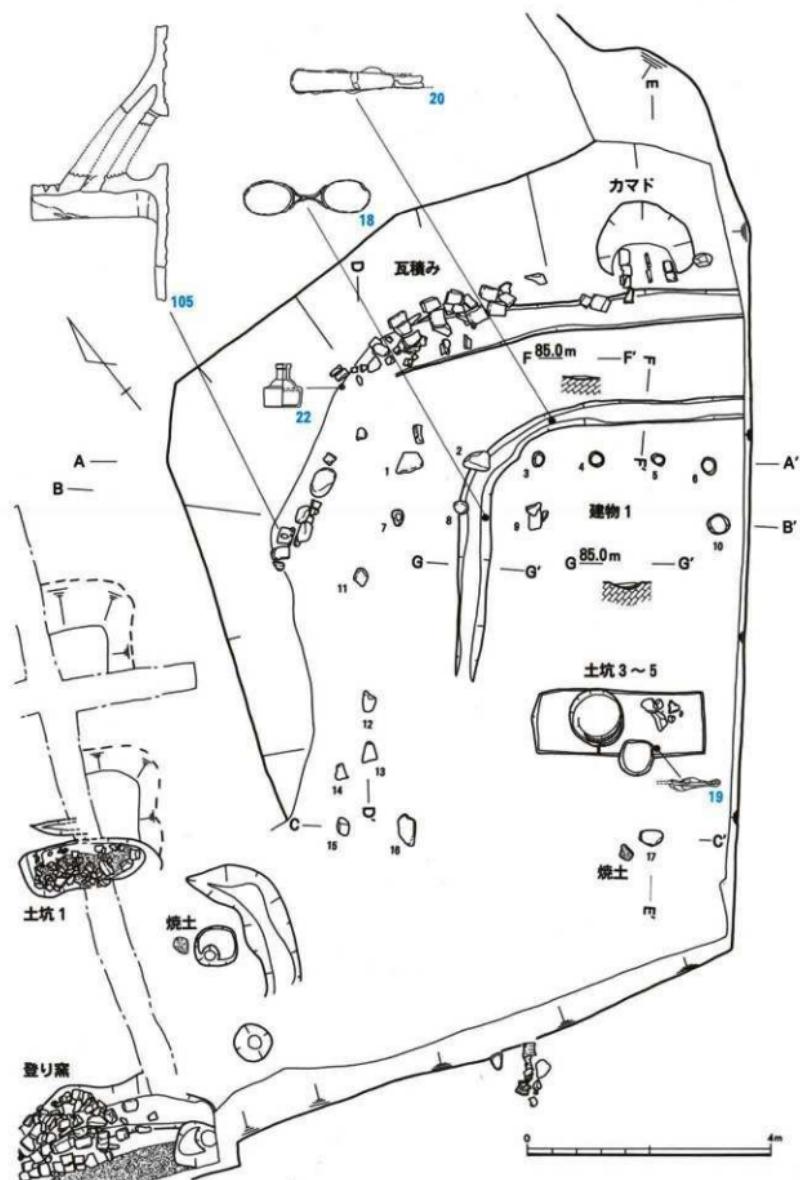
排図 番号	写真 図版 番号	遺物 番号	名 称	器種	材質	寸法(cm)					初鋳年代	出土地点	備考	
						a	b	c	d	e				
12	22	23	寛永通宝	銅貨	銅	2.1	2.1	1.7	1.7	0.9	0.9	元禄10(1697)年	調査区外西斜面	新寛永
12	22	24	寛永通宝	銅貨	銅	2.2	2.2	1.8	1.9	1.0	1.0	元禄10(1697)年	作業場1床	新寛永



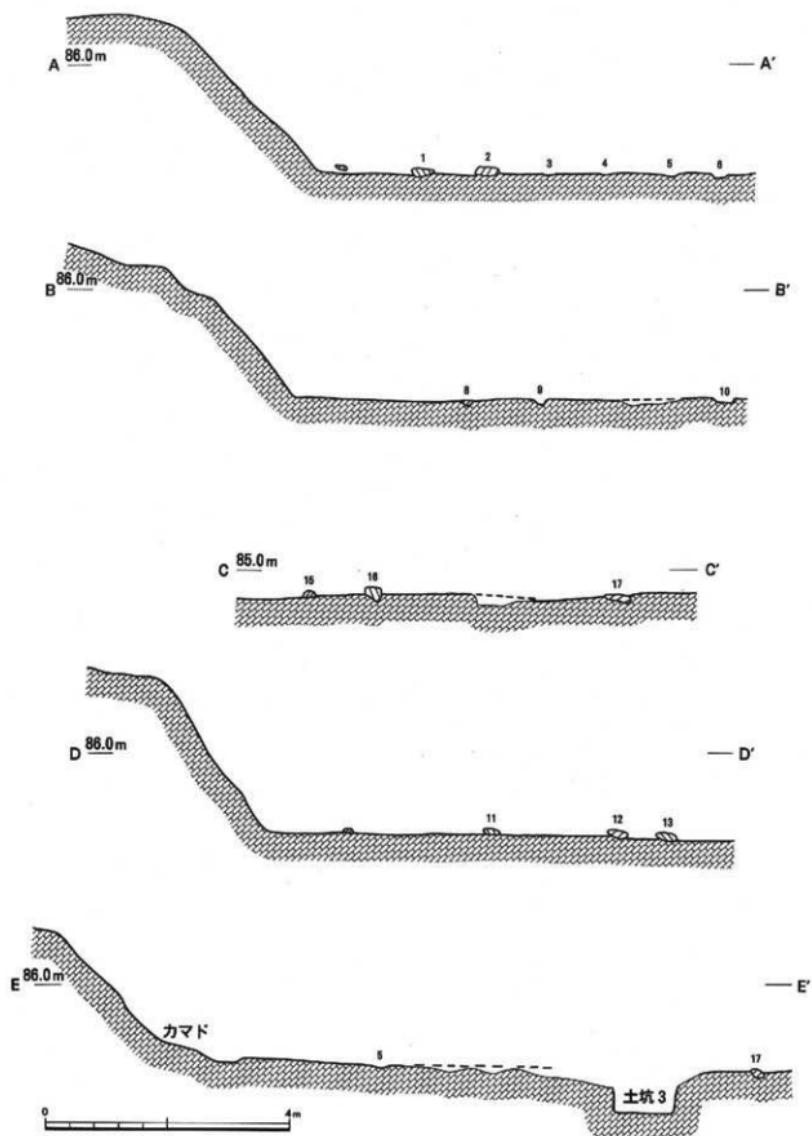
第6図 飯田A遺跡 登り窯周辺遺構 (S = 1 / 80)



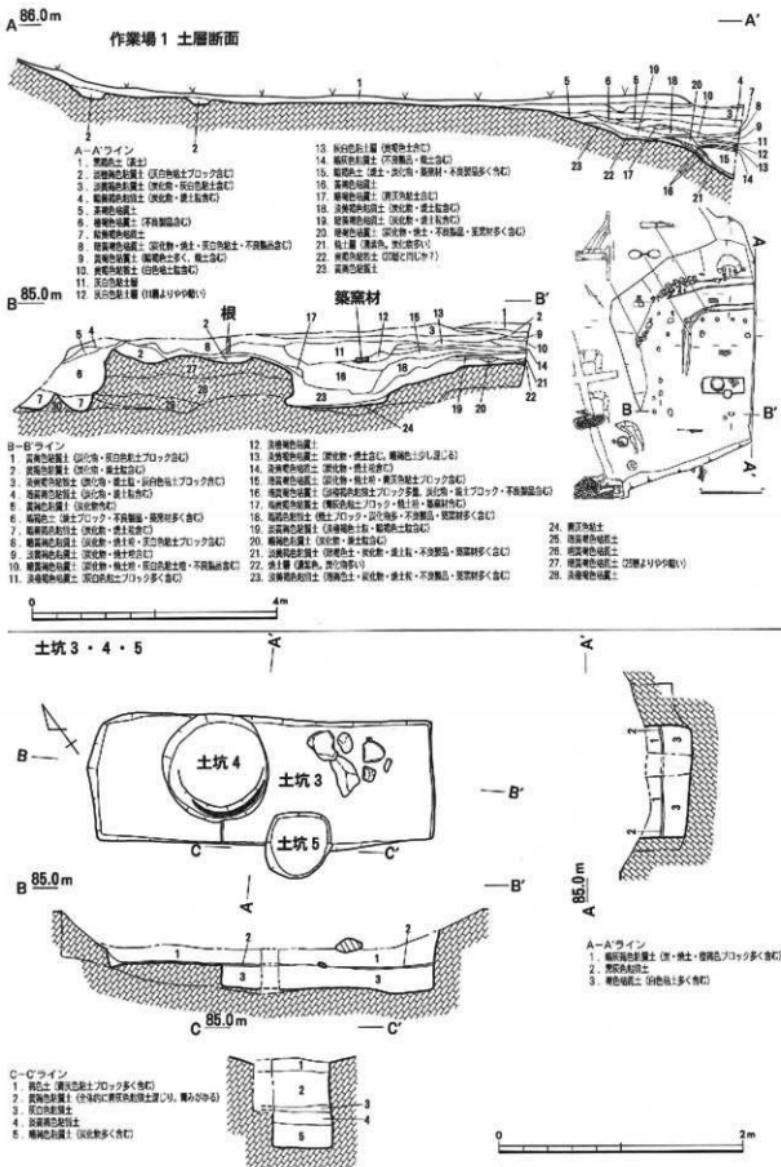
第7図 飯田A遺跡 土坑1・2、登り窯 (S = 1/40)



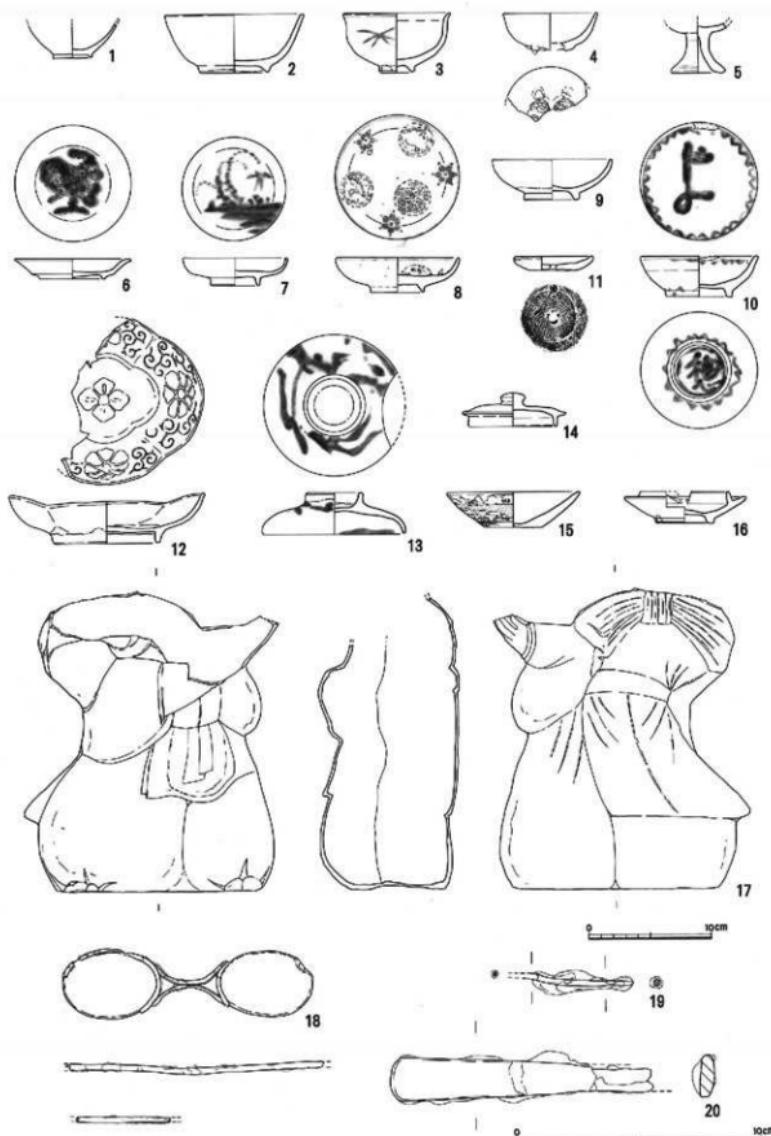
第8図 飯田A遺跡 作業場1平面 (S = 1/80)



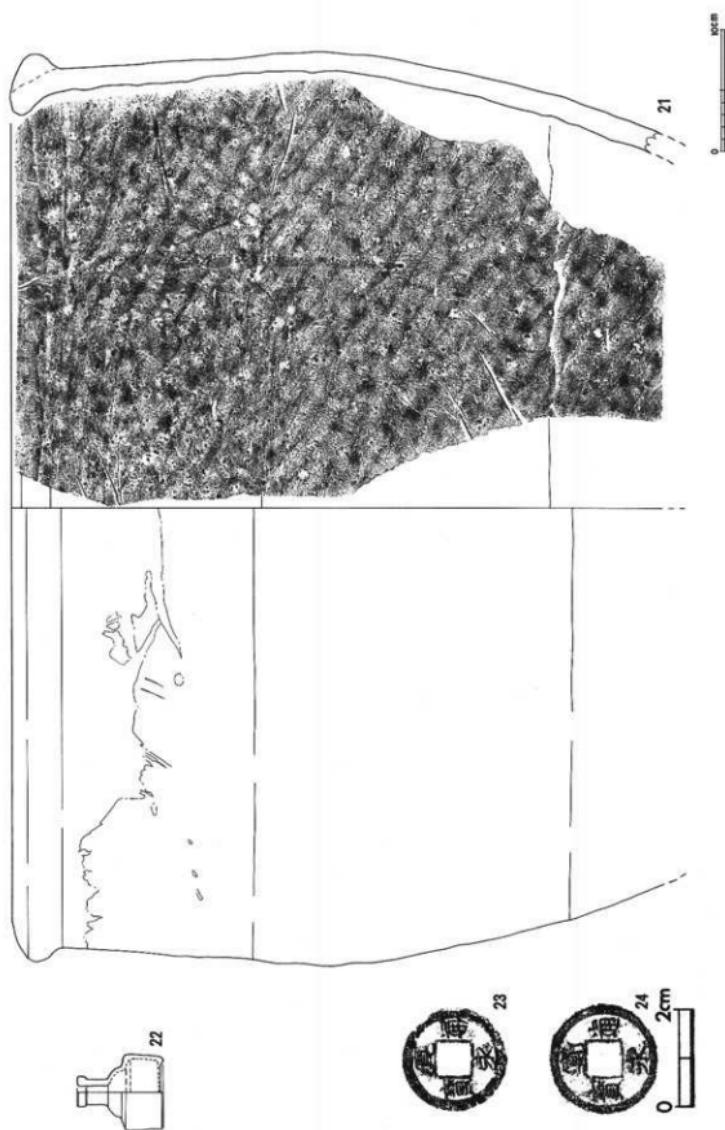
第9図 飯田A遺跡 作業場1断面 ($S = 1/80$)



第10図 飯田A遺跡 作業場1土層断面 (S=1/80)、土坑3・4・5 (S=1/40)



第11図 飯田A遺跡 出土遺物① (1~17はS=1/4、18~20はS=1/2)



第12図 飯田A遺跡 出土遺物② (21・22はS = 1 / 4、23・24はS = 1 / 1)

3. 物原・作業場2（第5・13図、写真図版13~17）

物原の調査はまず平坦地に任意の主軸A-A'を設定し、登り窓の検出が予想された南側斜面には主軸と直行するB-B'、C-C'を設定して北側から掘り下げた。その結果、主軸上層断面の標高約85.2mと85.4m付近で、黄褐色粘質土がほぼ水平に堆積していることを確認した。さらに、その黄褐色土に扁平な石（建物2の礎石1）がめり込み、付近で地山に設置された窓を検出したので、物原内に貼床を施した作業場が造られていたと判断した。そこで、黄褐色粘質土より上の堆積物を除去した後精査を行うと礎石建物が検出され、統いて地山面でもコの字状の溝と方形の土坑を検出した。以上の状況から、尾根上の平坦地は当初礎石建物を建てて作業場とし、次に不良製品を水平に敷いた後に貼床して建物を建て直し、最後に大量の不良製品を廃棄したと考えられる。

建物2（第14図、写真図版17）

物原内の貼床面で検出した。本来の柱配置は4×5間と考えられ、北西の礎石は調査当初に建物を認識できず外してしまった可能性が高い。また、南側の桁行きは斜面に近く、礎石は3個を残し流失していた。柱間距離は4.5尺と5尺に揃えている。床面は西側に薄く炭が堆積し、東側は所々熱を受けて赤く変色していた。建物の東コーナーで検出した溝は本来北側全てをめぐっていたと考えられ、長東坊跡窓跡の例（第4章）から窓25・26はこの溝に関連したものと推測される。

第6表 飯田A遺跡 建物2計測表

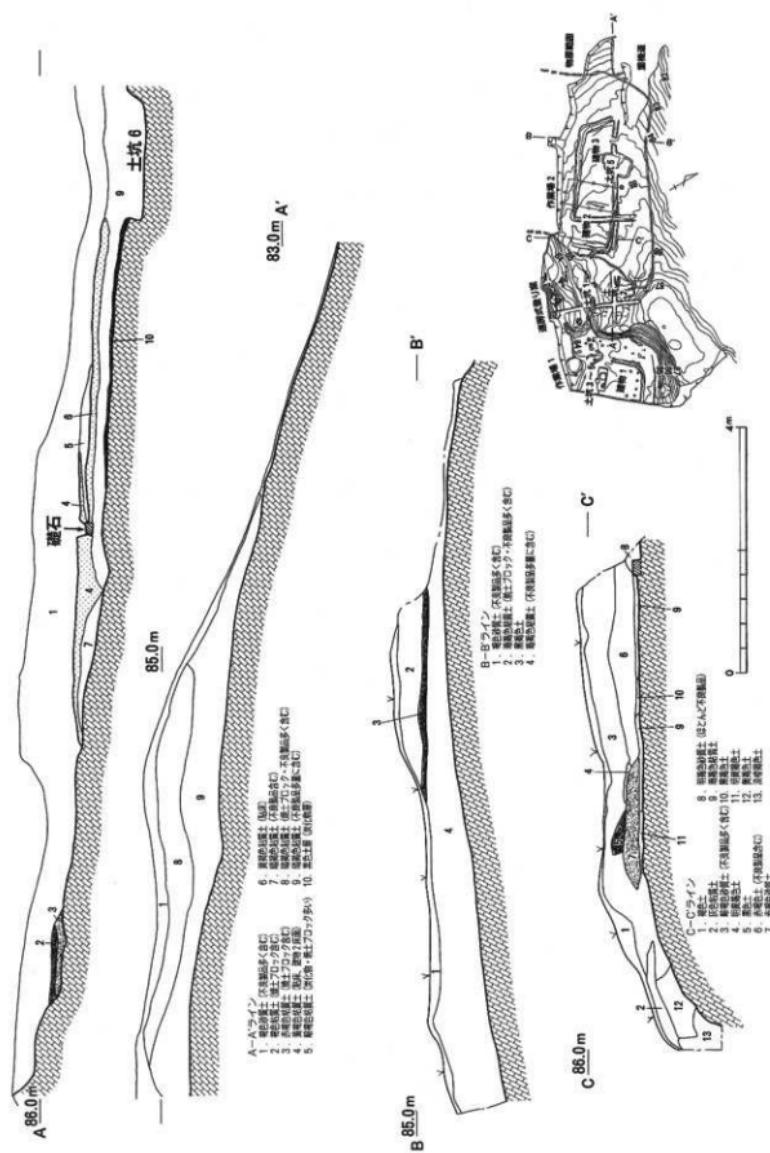
規 模	番 号	棟 行 き										折 行 き									
		4 間										4 間 以 上									
		N - 49° - W																			
礎石・穴	主 軸	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10										
	番 号	32×32	45×20	40×32	35×29	38×26	36×34	42×34	38×37	40×31	42×28										
	平面規模(cm)	85.32	85.28	85.26	85.26	85.03	85.23	85.31	85.00	85.22	85.34										
	標高(m)	上面	底面	上面	底面	上面	底面	上面	底面	上面	底面										
	礎石・穴	85.20	85.12	85.12	85.14	84.85	85.02	85.20	84.84	85.00	85.19										
	番 号	11	12	13	14	15	16														
	平面規模(cm)	28×22	43×29	35×34	34×27	39×34	42×19														
	標高(m)	上面	底面	上面	底面	上面	底面	上面	底面	上面	底面										
	柱間距離(cm)	1-2	2-3	3-4	4-15	15-16	5-8	8-11	1-6	6-9	6-12										
		135	135	135	135	250	150	150	150	150	150										
		12-15	4-7	7-10	10-13																
		190	150	150	150																

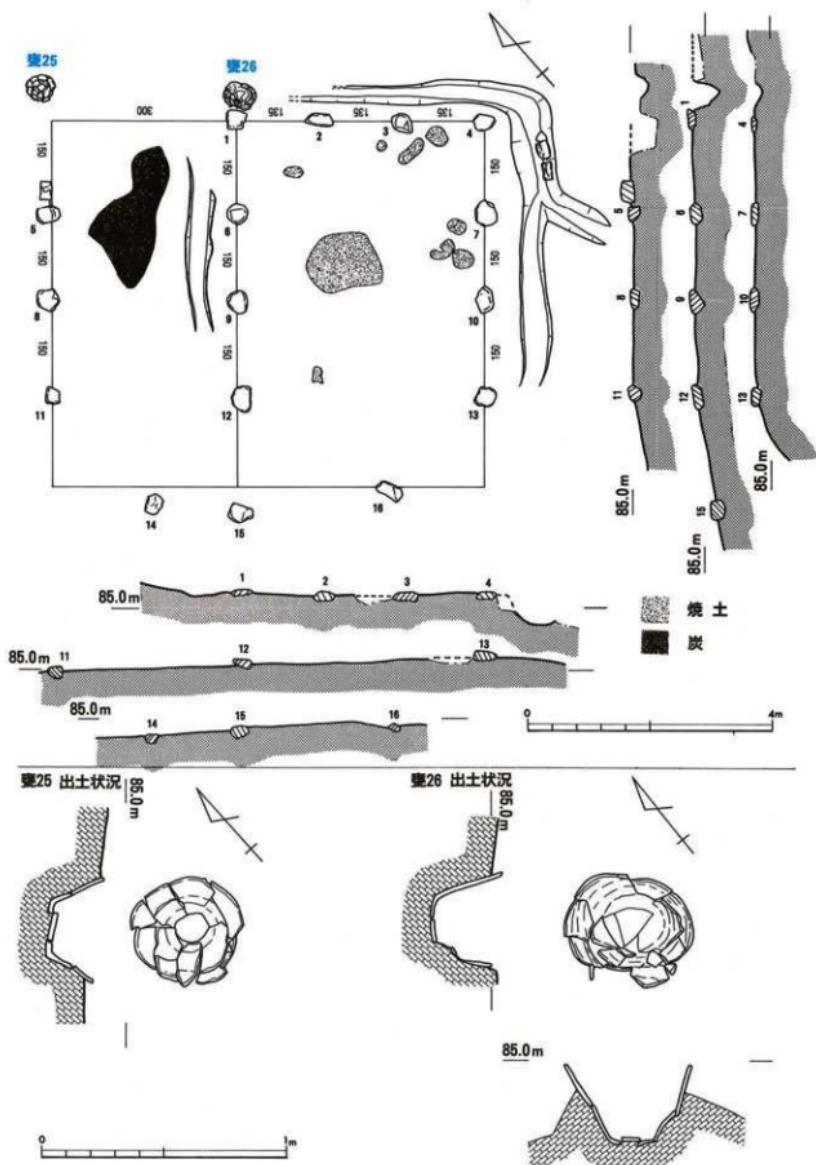
建物3・土坑6（第15図、写真図版18）

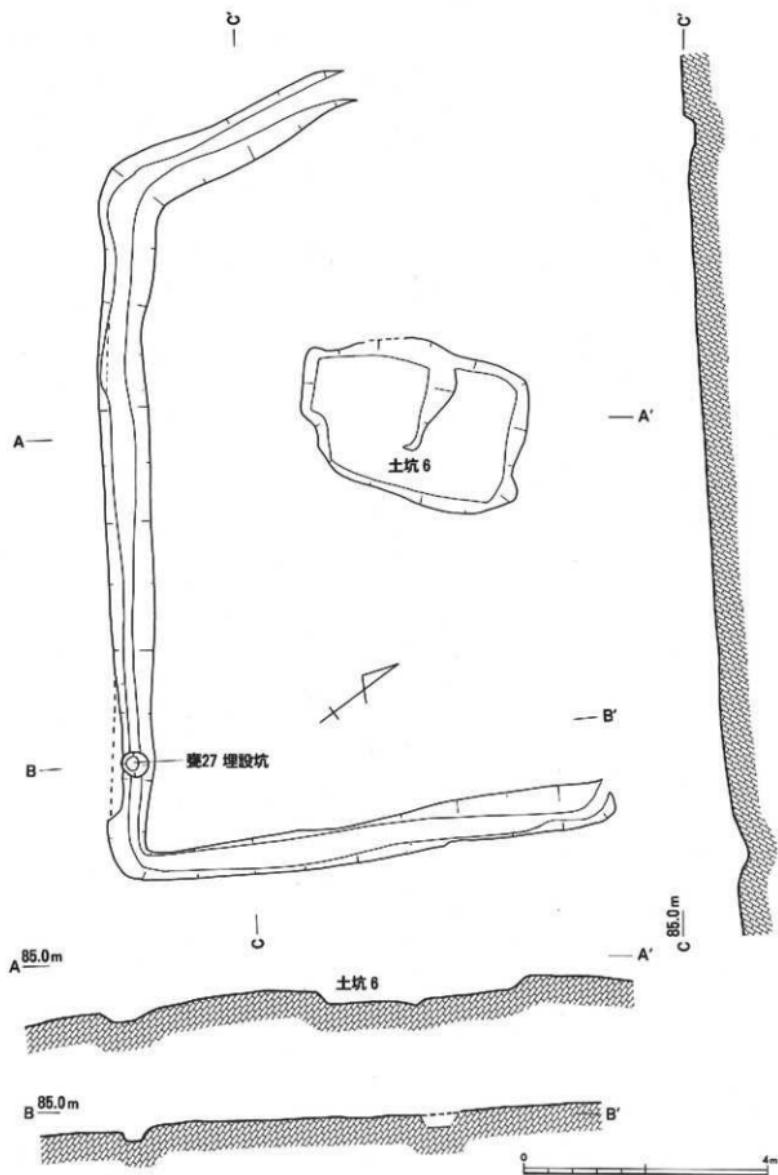
地山面で検出した。礎石や柱穴は検出していないが、溝の中には窓27が据えられていた。溝の平面形や規模等から、建物2と同様の礎石建物が建てられており、建物2は建物3を反転させて立て直したと推測される。土坑6の性格は建物3に伴う水槽等が考えられる。

第7表 飯田A遺跡 土坑計測表

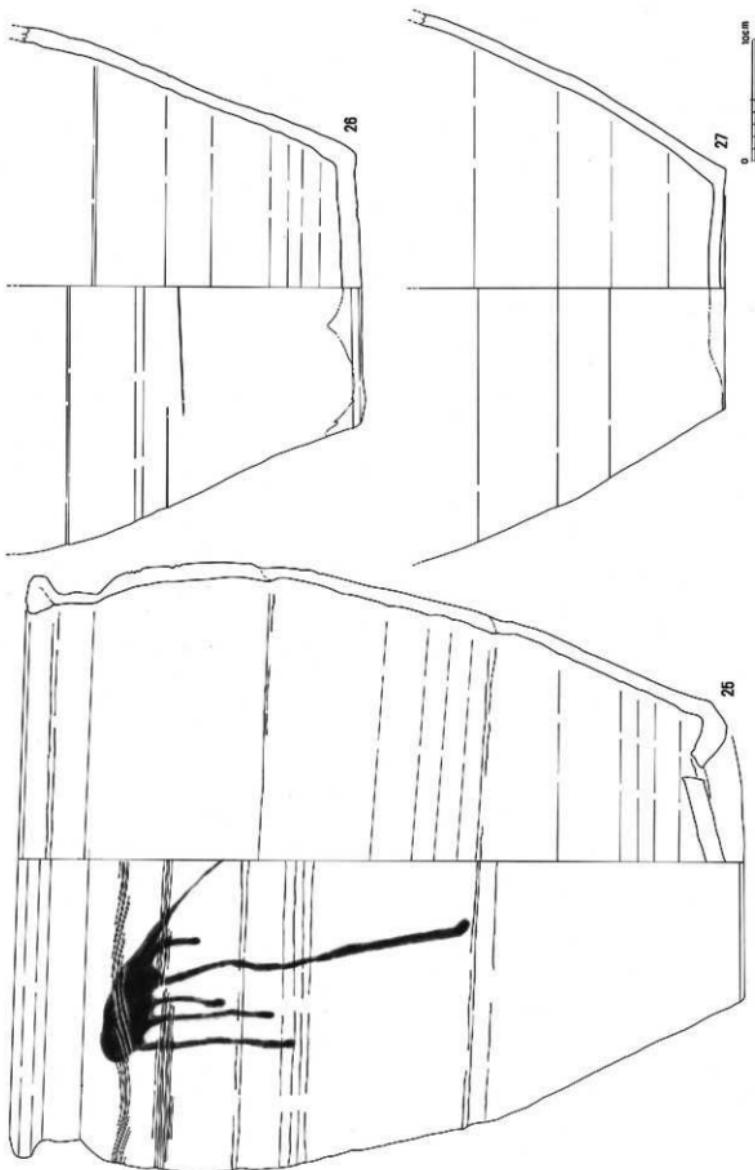
番号	上面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	主 軸	出土遺物	備 考
1	不整長方形	220	78	42	N- 65° - W	不良製品・アゼ	床面には炭・燒土が堆積
	不整長方形	187	49				
2	不整長方形	(160)	88	88	N- 20° - W	窓道具・石	
	不整長方形	(158)	58				
3	長方形	284	105	69	N- 53° - W	窓道具・鉄器	堆積層中に炭の面有り
	長方形	274	100				
4	円形	88	84	58	N- 54° - W		床面に橋の痕跡
	円形	81	79				
5	不整円形	62	55	74	N- 80° - W		
	不整円形	53	51				
6	長方形	378	257	46	N- 48° - W	不良製品・窓道具	建物3の水槽？
	長方形	326	204				



第14図 飯田A遺跡 建物2 ($S = 1/80$)、甕出土状況 ($S = 1/20$)



第15図 飯田A遺跡 建物3・土坑6 (S = 1 / 80)



第16図 飯田A遺跡 出土遺物③ ($S = 1 / 4$)

建物2・3出土遺物（第16図、写真図版15・22）

作業場2で検出した建物の溝には4斗入りの甕が据えられていた。これらの甕は本遺跡の不良製品を利用した物と判断され、出土状況から窯の操業期間の中では初期の製品と思われる。

第8表 飯田A遺跡 建物2・3出土遺物観察表

博団 番号	写真 図版	遺物 番号	種別	器 種	寸 法 (cm)					胎 土	釉 菓	出土地点	備 考
					a	b	c	d	e				
16	23	25	陶器	大甕	41.0	60.0	22.0	49.6	—	灰色	未待釉	建物2	
16	23	26	陶器	大甕	?	?	22.0	?	—	淡茶灰色	未待釉	建物2	
16	23	27	陶器	大甕	?	?	19.8	?	—	淡茶灰色	未待釉	建物3	

4. 出土遺物（第17～22図、写真図版23～32）

ここでは物原出土の不良製品を中心に、本遺跡の窯業生産に関連した遺物を主に扱うこととする。物原内で出土した陶器は現地で器種毎に大まかに分類し、主な物を持ち帰った。現地で破片数のカウント作業は行っていない。図化するにあたっては形状や寸法等で再度代表的な物を選択し、釉薬の違いは写真図版で示すことにした。なお、物原の出土品を不良製品、築窯材、窯道具に分けてみると、凡そ1:2:3の割合であった（写真図版18）。

丸物・その他の製品（第17～20図、写真図版23～29、32）

碗・皿・鉢・甕・壺・瓶・鍋等が出土している。基本的に本遺跡で生産された製品で、図化した遺物の中には未焼成品も一部含まれる。詳しくは第5章で述べるが、形状や釉の発色、機種構成などから、江津道路建設用地内で調査した窯業遺跡の生産品の中で最も古い時期のものと推測される。

瓦（第20・21図、写真図版30）

作業場1の土留めに使用されていた瓦である。図化した物は全て来待釉をかけられている。物原では瓦用の窯道具も出土しているが非常に数が少ない。また、丸物窯の約50m西方で瓦窯を確認しているので、そちらで生産された可能性もある。

窯道具（第21・22図、写真図版31）

丸物用と瓦用の両方が出土している。丸物用の焼き台のうち、111～114は円盤状の台部に短い足が付くものである。このタイプの焼き台は、遺跡周辺では浜田市の動木窯跡で表採されている⁽⁴⁾。また、江戸後期の窯業遺跡である益田市の中右門山遺跡（文献11）ではこのタイプばかり出土したと報告されている。130は「ハセドロ」と呼ばれ、大型品の重ね焼きに使用される。131～133は瓦用の窯道具である。134・135は焼き台から製品を剥がすのに使用したと推測される。古八幡付近遺跡8区（文献14）でもこれと良く似たものが、窯業関連の遺物と共に出土している⁽⁵⁾。

未焼成品（写真図版32）

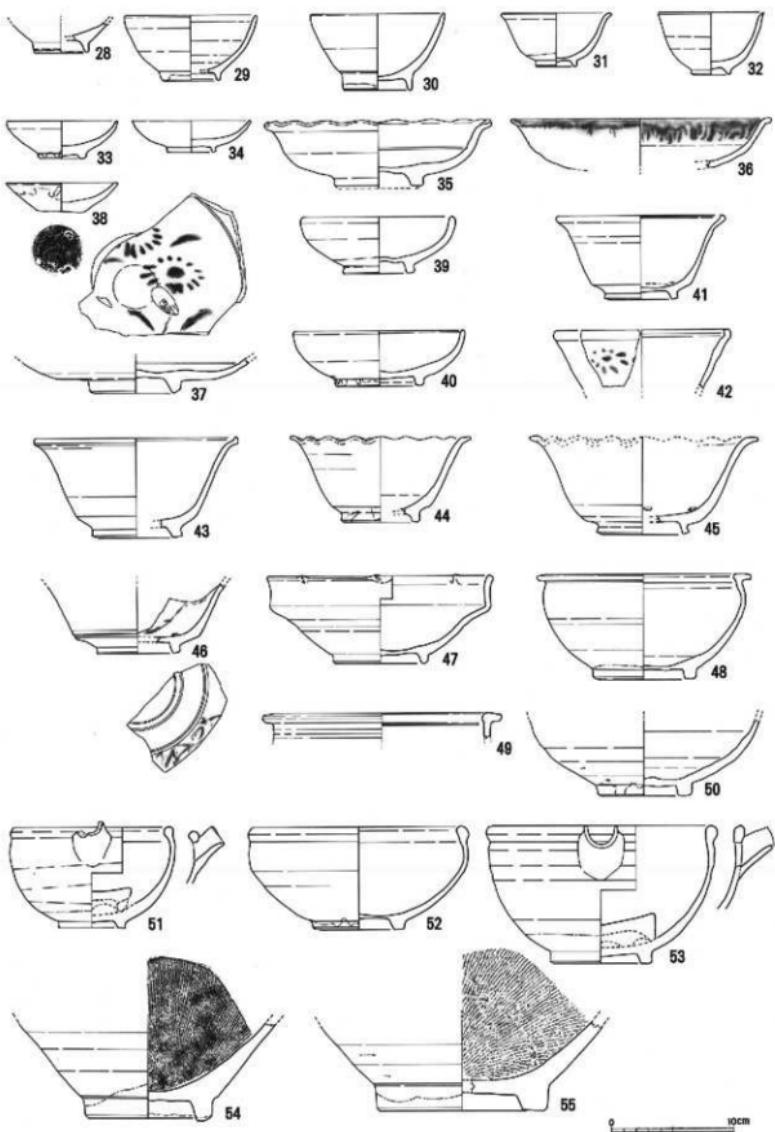
施釉前の未焼成品が、上坑2周辺から尾根上にかけての狭い範囲で出土している。丸物と丸物用の焼き台が出土しており、これらが確実に本遺跡の生産品であることを示している。

その他の出土遺物（第22図、写真図版31）

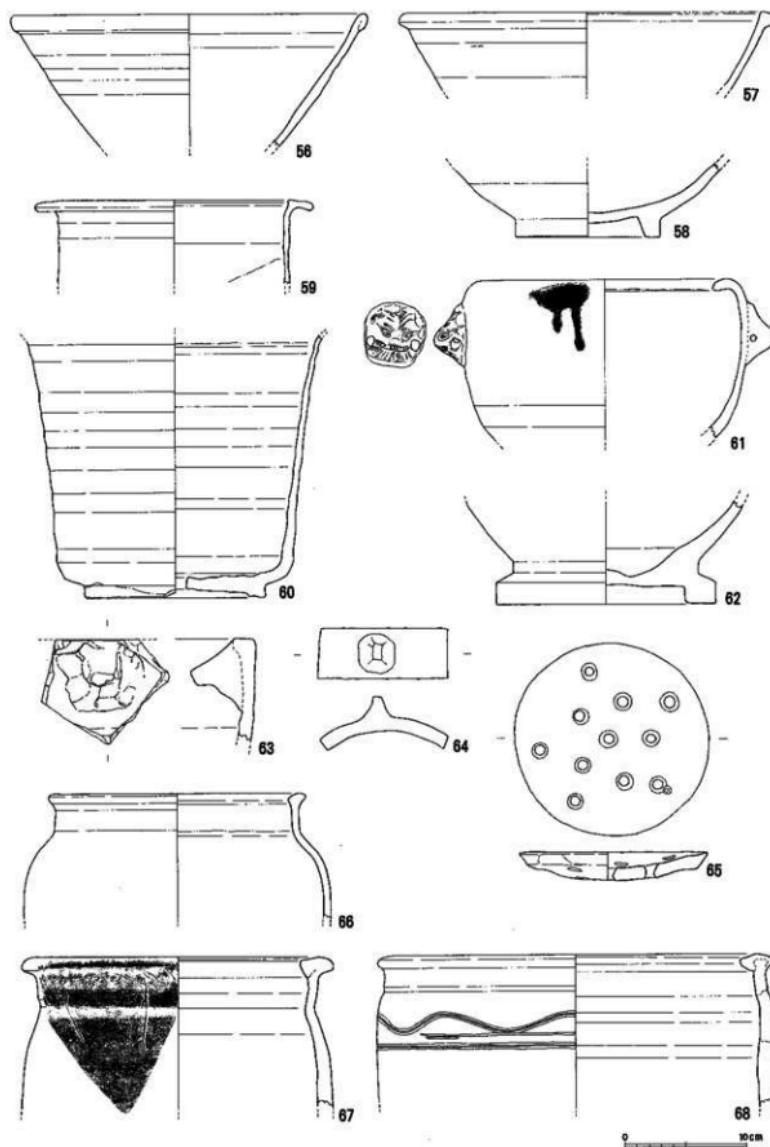
136は焙培の口縁部で、本遺跡の生産品かは不明である。137は須恵器甕の胴部破片で、調査区内で出土した遺物の中で唯一近世以前のものである。付近に近世以前の遺構が存在する可能性がある。

(4) 一沢治雄氏に動木窯跡の資料を見せていただいた。動木窯跡には3基の登り窯が存在し、それぞれ板に1～3期としておく。各登り窯の推測される操業時期等は第5章に記述する。

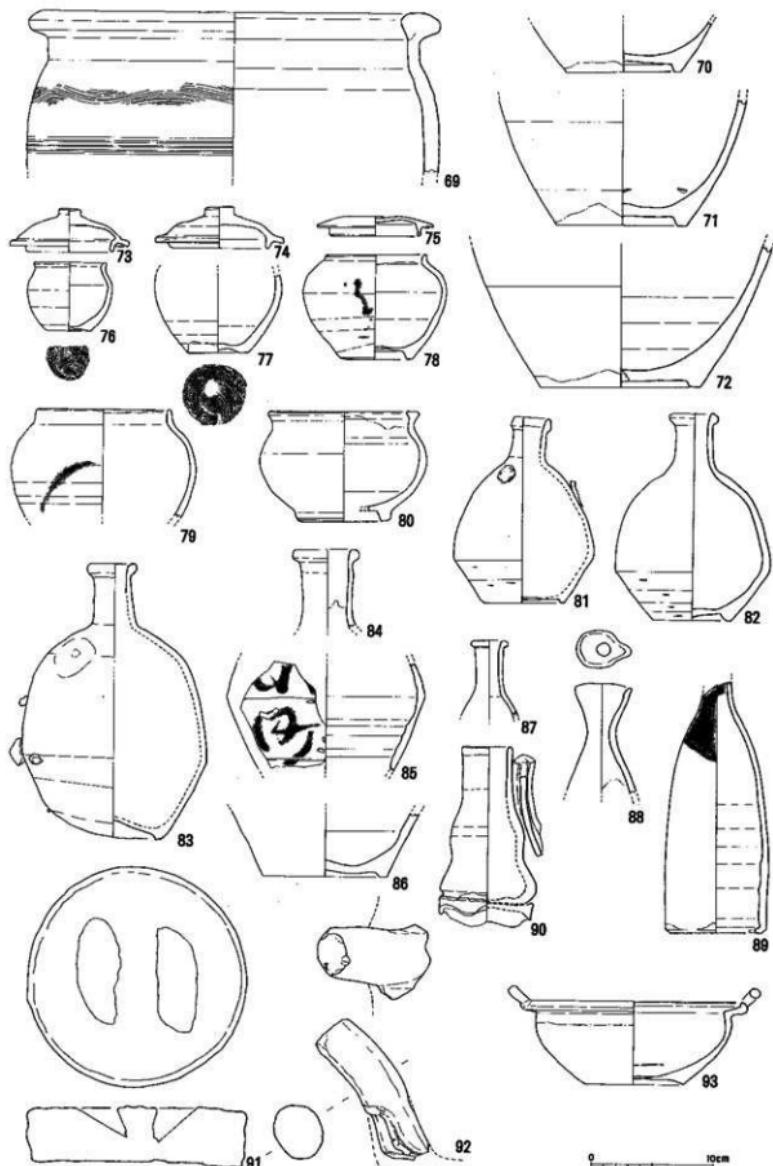
(5) 文献14の60頁34行では鉄釘として報告しているが、形状や長さから134・135と同様の窯道具と思われる。



第17図 飯田A遺跡 出土遺物④ (S = 1/4)



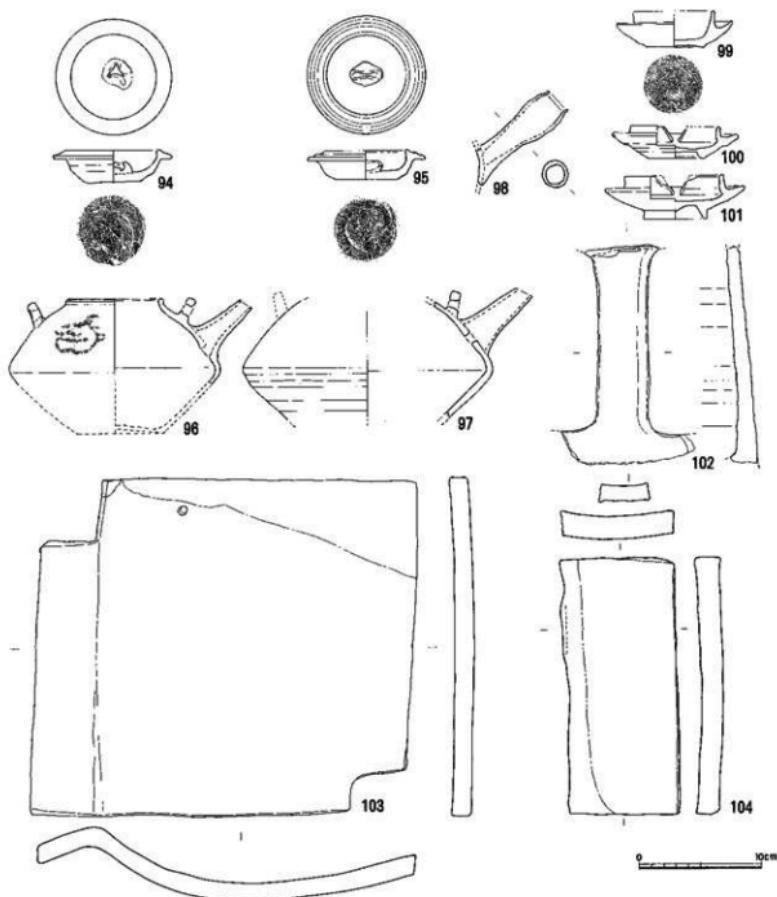
第18図 飯田A遺跡 出土遺物⑤ ($S = 1/4$)



第19図 飯田A遺跡 出土遺物⑥ (S = 1/4)

第9表 飯田A遺跡 出土陶器観察表

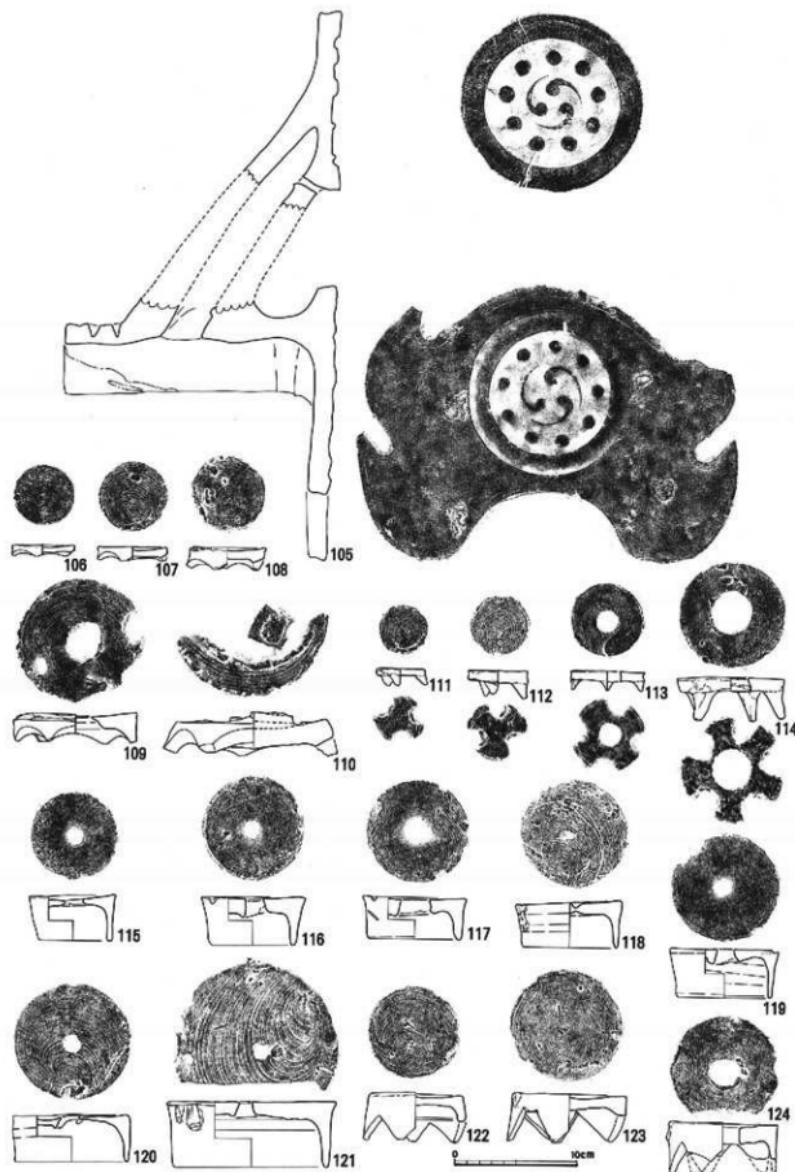
被目 番号	写真 図版 番号	遺物 種別	器種	寸法(cm)					胎土	釉薬	出土地点	備考	
				a	b	c	d	e					
17	21	29	陶器	中壺	?	?	4.5	-	-	明灰色	コバルト	物原	
17	21	29	陶器	中壺	10.7	5.4	4.6	-	-	暗灰色	黒色釉	物原	
17	21	30	陶器	中壺	10.8	6.3	5.6	-	-	深茶白色	並釉	物原	
17	21	31	陶器	小壺	8.8	4.4	2.8	-	-	暗青灰色	並釉	物原	
17	21	32	陶器	小壺	8.5	5.2	2.8	-	-	明黄色	並釉	物原	
17	21	33	陶器	小壺	9.0	3.1	3.9	-	-	明褐色	並釉	物原	
17	21	34	陶器	小壺	9.6	2.7	4.0	-	-	深茶褐色	並釉	物原	
17	21	35	陶器	中壺	18.4	5.5	7.3	-	-	暗灰色	並釉	物原	口縁部波状
17	24	38	陶器	中壺	(21.0)	?	?	-	-	灰色	並釉	物原	口縁部は複数
17	24	37	陶器	中壺	?	?	7.4	?	-	灰色	並釉	物原	見入込みに花の鉄絵
17	23	38	陶器	灯明壺	9.0	2.4	3.8	-	-	灰色	並釉	物原	底部回転糸切
17	24	39	陶器	小鉢	12.1	4.7	5.8	12.6	-	淡黄色	並釉	物原	
17	24	40	陶器	小鉢	13.6	4.5	7.2	-	-	深茶褐色	並釉	物原	
17	24	41	陶器	小鉢	(14.0)	8.8	6.0	-	-	灰色	並釉	物原	
17	24	42	陶器	小鉢	(13.6)	?	?	-	-	深青褐色	並釉	物原	花の鉄絵
17	24	43	陶器	中鉢	(16.8)	8.2	(7.4)	-	-	褐色	並釉	物原	
17	24	44	陶器	小鉢	14.6	7.1	(6.3)	-	-	明灰色	並釉	物原	口縁部波状
17	25	45	陶器	中鉢	(18.7)	8.0	(7.5)	-	-	黄土色	並釉	物原	口縁部波状 口縁部は白物
17	24	46	陶器	中鉢	?	?	(6.8)	-	-	淡灰褐色	並釉	物原	外縁に灰?の鉄絵
17	25	47	陶器	中鉢	17.6	7.2	7.7	4.7	-	灰色	並釉	物原	
17	25	48	陶器	中鉢	17.5	8.6	8.5	-	-	淡青褐色	並釉	物原	
17	25	49	陶器	中鉢	(19.6)	?	?	-	-	灰色	並釉	物原	
17	25	50	陶器	中鉢	?	?	7.6	-	-	灰色	並釉	物原	
17	25	51	陶器	片口	13.4	8.3	5.5	15.4	-	淡灰色	並釉	物原	内縁に焼台溶着
17	25	52	陶器	片口	(18.0)	8.5	7.5	?	-	灰色	並釉	物原	
17	25	53	陶器	片口	(18.0)	(13.0)	8.2	21.3	-	灰色	並釉	物原	内縁に焼台溶着
17	25	54	陶器	瓶鉢	?	?	10.4	-	-	暗灰色	未待釉	物原	
17	26	55	陶器	瓶鉢	?	?	14.0	-	-	淡青褐色	未待釉	物原	一部暗灰色
18	25	56	陶器	瓶鉢	(29.2)	?	?	-	-	灰色	並釉	物原	
18	25	57	陶器	瓶鉢	(30.7)	?	?	-	-	灰色	並釉	物原	
18	25	58	陶器	瓶鉢	?	?	11.7	-	-	灰色	並釉	物原	
18	25	59	陶器	埴木鉢	(22.7)	?	?	-	-	青灰色	皮輪	物原	口縁部に鉄絵
18	25	60	陶器	埴木鉢	?	?	14.8	-	-	灰色	並釉	物原	底部に厚14mmの穴
18	26	61	陶器	火鉢	(17.6)	?	?	(27.9)	-	黄褐色	並釉	物原	口縁部に「浅し」取手部歎面
18	27	62	陶器	火鉢	?	?	18.0	?	-	淡褐色	一	物原	系焼き
18	27	63	陶器	炉	?	?	7.2	?	-	淡白色	一	物原	兩枚底
18	27	64	陶器	七重鉢	10.6	4.1	2.8	1.1	3.0	淡白色	一	物原	風口の蓋
18	27	65	陶器	七重鉢	15.9	15.8	2.3	-	-	淡青褐色	一	物原	さな
18	27	66	陶器	中壺	(21.0)	?	?	(25.0)	-	灰色	並釉	物原	
18	27	67	陶器	中壺	(25.5)	?	?	(25.5)	-	深墨灰色	未待釉	物原	
18	27	68	陶器	中壺	(32.3)	?	?	(32.6)	-	明褐色	未待釉	物原	
19	27	69	陶器	中壺	34.0	?	?	33.8	-	暗褐色	未待釉	物原	
19	27	70	陶器	中壺	?	?	9.3	?	-	暗灰色	未待釉	物原	
19	27	71	陶器	中壺	?	?	10.6	?	-	灰色	未待釉	物原	
19	27	72	陶器	中壺	?	?	12.9	?	-	淡青褐色	未待釉	物原	
19	28	73	陶器	蓋	9.6	3.6	1.8	7.2	-	灰色	未待釉	物原	
19	28	74	陶器	蓋	10.5	3.4	2.5	7.8	-	淡青褐色	並釉	物原	
19	28	75	陶器	蓋	9.5	1.6	-	7.4	-	淡青灰色	並釉	物原	
19	28	76	陶器	小鉢	5.9	5.6	3.6	7.0	-	青灰色	並釉	物原	底部回転糸切り
19	28	77	陶器	小鉢	?	?	5.0	10.4	-	灰色	並釉	物原	底部回転糸切り
19	28	78	陶器	小鉢	6.3	8.7	5.9	11.8	-	淡青白色	並釉	物原	開口部「浅し」
19	28	79	陶器	中壺	(11.0)	?	?	(15.3)	-	淡青褐色	並釉	物原	外縁に鉄絵
19	28	80	陶器	小鉢	(12.4)	8.9	(7.7)	(13.0)	-	灰色	並釉	物原	
19	28	81	陶器	中鉢	3.3	15.0	6.5	11.4	-	淡青褐色	並釉	物原	
19	28	82	陶器	中鉢	3.9	17.0	6.4	12.5	-	淡黄色	-	物原	系焼き
19	28	83	陶器	大鉢	4.0	22.5	8.0	15.1	-	灰色	並釉	物原	
19	28	84	陶器	大鉢	5.4	?	?	?	-	暗灰色	青銀釉	物原	
19	28	85	陶器	大鉢	?	?	?	16.1	-	灰色	並釉	物原	鉄絵で「…小町」の文字を描く
19	28	86	陶器	大鉢	?	?	10.1	?	-	暗灰色	並釉	物原	
19	28	87	陶器	煙袋杓	3.0	?	2	?	-	青灰色	長輪	物原	
19	28	88	陶器	煙袋杓	4.5	?	?	?	-	青灰色	長輪	物原	頭部は白物
19	28	89	陶器	煙袋杓	?	?	8.2	8.4	-	淡青反色	並釉	物原	外面上部は鉄絵
19	32	90	陶器	仙花瓶	4.2	12.7	(6.0)	7.8	-	灰色	輪物	物原	
19	28	91	陶器	蓋	18.1	18.1	4.8	-	-	墨色	墨色	物原	濁物石?
19	29	92	陶器	十輪	?	(12.5)	?	?	4.3	淡灰白色	一	物原	系焼き
19	29	93	陶器	土鍋	18.5	8.0	6.0	20.6	-	暗青褐色	未待釉	物原	
20	29	94	陶器	蓋	9.7	2.6	2.6	7.7	-	淡黄色	並釉	物原	土瓶類の蓋 車輪糸切り
20	29	95	陶器	蓋	9.6	2.4	2.7	8.0	-	淡褐色	並釉	物原	土瓶類の蓋 回転糸切り
20	29	96	陶器	土瓶	7.7	(11.0)	(7.0)	17.2	-	灰色	並釉	物原	
20	29	97	陶器	土瓶	?	?	?	(20.4)	-	淡灰色	並釉	物原	
20	29	98	陶器	行平	?	?	?	?	-	淡青反色	並釉	物原	
20	29	99	陶器	灯明受皿	9.5	3.0	4.7	6.5	-	淡白黄色	並釉	物原	回転糸切り
20	29	100	陶器	灯明受皿	10.3	2.7	4.5	7.1	-	灰色	並釉	物原	系焼き
20	29	101	陶器	灯明受皿	11.5	3.6	5.1	7.9	-	皮白色	-	物原	系焼き
20	29	102	陶器	五徳	?	?	?	?	-	淡青白色	-	物原	



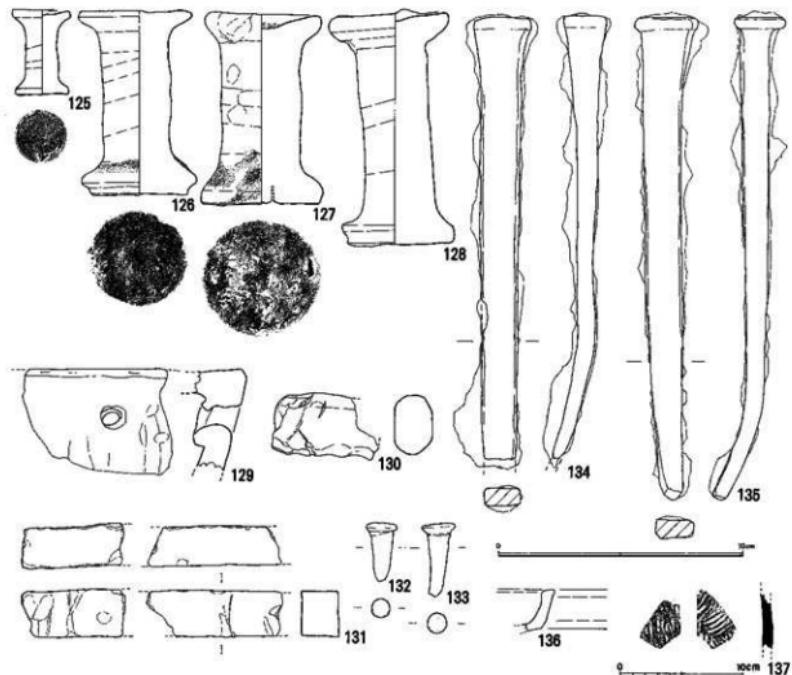
第20図 飯田A遺跡 出土遺物② (S = 1/4)

第10表 飯田A遺跡 出土瓦観察表

埠固 番号	写真 図版 番号	遺物 種別	器種・形状	寸 法 (cm)											胎 土	胎 葉	出土地点	備考		
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l					
20	30	103	瓦	棲瓦	27.7	1.8	3.4	31.7	—	—	—	—	—	—	—	淡茶褐色	赤滑輪	物原		
20	30	104	瓦	蟻斗瓦	20.9	1.8	9.3	—	—	—	—	—	—	—	—	黄色	赤滑輪	物原		
21	30	105	瓦	椎止瓦	14.5	1.8	10.8	1.8	1.9	14.5	10.7	1.9	1.9	—	22.3	22.2	31.4	淡黄色	赤滑輪	作業場1 「下り太鼓」
					13.4	1.8	10.2	1.5	1.7	13.0	9.8	1.6	1.6	—						



第21図 飯田A遺跡 出土遺物⑧ ($S = 1/4$)



第22図 飯田A遺跡 出土遺物⑨ (125~133・136・137はS = 1/4、134・135はS = 1/2)

第11表 飯田A遺跡 出土窯道具・その他の遺物観察表

番号	写真 記録	遺物 記録	種別	形 様	寸 法 (cm)				地 土	附 連	出土地点	備 考	
					a	b	c	d					
21	31	105	窯道具	ハリ	5.1	6.0	—	—	黄褐色	—	物質		
21	31	107	窯道具	ハリ	5.7	13	—	—	黄褐色	—	物質		
21	31	108	窯道具	ハリ	6.4	18	—	—	黄褐色	—	物質		
21	31	109	窯道具	ハリ	10.6	27	3.5	—	黄褐色	—	物質		
21	31	110	窯道具	ハリ	12.3	3.0	—	—	黄褐色	—	物質		
21	31	111	窯道具	ハリ	4.8	12	—	—	黄褐色	—	物質		
21	31	112	窯道具	ハリ	5.0	2.3	—	—	黄褐色	—	物質		
21	31	113	窯道具	ハリ	6.1	1.6	1.8	—	黄褐色	—	物質		
21	31~30	114	窯道具	ハリ	6.6	2.8	3.4	—	黄褐色	—	物質		
21	31	115	窯道具	ハリ	7.1	3.8	1.4	—	黄褐色	—	物質		
21	31	116	窯道具	ハリ	6.5	4.0	1.4	—	黄褐色	—	物質		
21	31	117	窯道具	ハリ	5.1	5.5	2.2	—	黄褐色	—	物質		
21	31	118	窯道具	ハリ	6.7	3.9	—	—	黄褐色	—	物質		
21	31	119	窯道具	ハリ	9.0	4.0	1.5	—	黄褐色	—	物質		
21	31	120	窯道具	ハリ	9.5	3.8	1.6	—	黄褐色	—	物質		
21	31~30	121	窯道具	ハリ	13.8	5.3	1.1	—	黄褐色	—	物質	複記号有り	
21	31	122	窯道具	ハリ	7.8	3.7	—	—	黄褐色	—	物質		
21	31	123	窯道具	ハリ	9.3	3.8	—	—	黄褐色	—	物質		
21	31	124	窯道具	ハリ	8.7	4.1	2.5	—	黄褐色	—	物質		
22	31	125	窯道具	ハリ	4.5	7.0	4.4	2.5	—	黄褐色	—	物質	
22	31	126	窯道具	ハリ	9.0	15.5	8.0	5.5	—	黄褐色	—	物質	
22	31	127	窯道具	ハリ	10.0	15.8	9.4	6.5	—	黄褐色	—	物質	
22	31	128	窯道具	ハリ	9.0	18.7	9.5	5.5	—	黄褐色	—	物質	
22	31	129	窯道具	ハリ	9.5	18.5	9.5	5.5	—	黄褐色	—	物質	
22	31	130	窯道具	ハリ	9.5	18.5	9.5	5.5	—	黄褐色	—	物質	
22	31	131	窯道具	ハリ	9.5	18.5	9.5	5.5	—	黄褐色	—	物質	
22	31	132	窯道具	ハリ	9.5	18.5	9.5	5.5	—	黄褐色	—	物質	
22	31	133	窯道具	ハリ	9.5	18.5	9.5	5.5	—	黄褐色	—	物質	
22	31	134	窯道具	ハリ	9.5	18.5	9.5	5.5	—	黄褐色	—	物質	
22	31	135	窯道具	ハリ	9.5	18.5	9.5	5.5	—	黄褐色	—	物質	
22	31	136	土器	壺	7	2.5	—	—	黄褐色	—	物質		
22	31	137	土器	壺	7	7	—	—	黄褐色	—	物質		

第3節 小 結

1. 遺構について

今回の調査では登り窯の一部を検出し、作業場と思われる平坦地と物原の発掘を行った。

登り窯は煙り出しを僅かに調査しただけで、全容は不明である。規模は周辺で調査された近代以降の登り窯に比べて小さく、煙出しがアゼと瓦を利用した簡易なものであった。また、窯の出入り口と作業用のテラスは、通常と逆の左側に造られている。これは登り窯の左手に工場本体が有り、製品の出し入れの都合を良くするためと考えられる。登り窯の斜面上方には薄い焼土の堆積が見られ段状の地形も確認されたが、全面発掘の結果登り窯の基底部は検出されなかった。しかし、登り窯の最後尾より上方でも土留めを施したテラスを検出し、アゼを根石にした柱穴や礎石と思われるものも検出している。さらに、尾根上の物原内で赤色に変化した築窯材や耐火砂を検出しているので、あるいは尾根付近まで続いている窯を後に縮小した可能性がある。

作業場は登り窯の東側と、西側の物原堆積層中の2か所で検出した。作業場1の全容は不明だが、床面造成土内には不良製品・築窯材・炭・焼土が含まれており、窯場の創業以後に造られたことが分かる。一方作業場2は、建物3が地表面に建てられ、一旦不良製品を廃棄した後に新たに建物2を建てて使用している。しかし、その後再び不良製品を廃棄し、以後尾根上は作業場として使われていない。以上の状況から、作業場の新旧関係は2が古く1が新しいと考えられる。

2. 出土遺物について

飯田A遺跡の生産品は、近年江津・浜田で発掘調査された窯の生産品と比較すると、器種構成や形状が異なっている。来往釉は焦げ茶色で光沢が鈍く、並釉は緑灰色を呈している。

灯明皿や灯明受け皿、30の様な肥前系の広東形碗を模したと考えられる碗は、他の窯の生産品に見られない器種である。また、41~46のタイプの鉢も同様で、特に44・45の様に口縁端部を波状に作るものは大正以降の窯では全く出土していない。甕は21を除いて全て「タテブチ」(頸部)の高いもので、全形の分かれる25はスマートで不安定なプロポーションである。十能(92)は未焼成品で、周辺では窯業関連遺跡でのみ出土している点が注意される^⑥。

作業場で出土したはんど(21)は、これまでに確認されたものとは大きく異なるつくりをしている。口縁は折り曲げず外側に粘土紐を貼り付けて拡張する。胎土は非常に荒く、焼きが甘いので暗赤褐色を呈している。实物を鷗田春男氏に鑑定していただいたところ、青山(江津市二宮町)の土であるとの教示を得た。初期のはんどが銹釉を塗布していたとする点は各文献ともほぼ一致した見解で、穴窯で生産していたとされる。この様な大型品はこれまでに発見された通常の窯では生産できず、不良製品は広範囲に出回らないので、周辺に古い時期の窯跡が存在する可能性が高い。

3. 操業時期について

聞き取り調査の結果では、飯田A遺跡の窯場は19世紀後半頃まで操業していたと推定される。各製品の厳密な時期は示せないが、動木窯跡第1期(19世紀前半)の資料に良く似ている点や他の窯の製品との比較から(第48~50図)、19世紀前半に遡るものも含まれていると考えられる。

(6) 敦川町古八幡付近遺跡、波子町大田屋窯跡で出土している。古八幡付近遺跡では不良製品・未焼成品・窯道具が出土しているので、周辺に窯業構造が存在すると考えられる。また、各遺跡とも1点ずつしか出土しておらず、販売用ではなく自家用に僅かに作られた可能性がある。



飯田 A 遺跡 遺跡遠景（東から）



飯田 A 遺跡 同上（西から）

写真図版 2



飯田 A 遺跡 調査区遠景（北西から）



飯田 A 遺跡 登り窯調査前（東から）



飯田 A 遺跡 登り窓（東から）



飯田 A 遺跡 土坑 1（西から）



飯田 A 遺跡 登り窯調査風景（東から）



飯田 A 遺跡 同上 断面（東から）



飯田 A 遺跡 土坑 1 断面（東から）



飯田 A 遺跡 同上 完掘後（西から）

写真図版 6



飯田 A 遺跡 作業場 5 土留め（南西から）



飯田 A 遺跡 作業場 3 土留め（西から）